
魔法少女リリカルなのはStrikerS でいてくていぶ!!

ドナドナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers でいてくていぶ！！

【Zコード】

Z9277U

【作者名】

ドナドナ

【あらすじ】

別世界への行き来が可能になった第一管理世界ミッドチルダ。別世界の技術によりミッドチルダの技術は飛躍的に上昇し、治安を納めている警察の名も管理局へ変わった。探偵業など仕事にならない、そんなご時世。ひとり探偵事務所を営む残念な男、ガジル・アルタレッタは今日も大人向けの雑誌を片手に事件へ挑む！ドナドナの完結済み作品魔法少女リリカルなのはStrikers～炎の刃～から生まれた спинオフ作品！！更新は作者の気分次第不定期更新！

依頼N.O.・1 地獄絵図展開（前書き）

どうもドナドナと申します

この作品はドナドナの完結済み作品魔法少女リリカルなのはStar
iker～炎の刃～から生まれた спинオフ作品です。

この作品で本編に興味を持たれた方は馴文ですが本編も読んでくれ
ると嬉しいです。

それでは、依頼N.O.・1をどうぞ。感想、指摘大歓迎です

依頼№・1 地獄絵図展開

第1管理世界ミッドチルダ

そのミッドチルダの都市、クラナガンにある一軒の事務所。

見るからに年期の入つたお世辞にも綺麗とは言えない一階建ての事務所。

一階は何やら危なげな臭いを漂わせるスナック

二階は特に変わった様子もなくひつそりとしている。

強いて変わったところを上げるとすれば、アルタレッタ探偵所と漢溢れる太い文字で書かれた看板を下げているだけである

そう。此処はクラナガンの数少ない探偵所、アルタレッタ探偵所。

一昔前、此処クラナガンでは探偵業とやらはそう少なくはなかつた。何かもめ事があれば警察じゃなくて探偵に頼りな。それほど探偵は信頼を得ていた

しかし、ピタリと探偵の信頼は途絶える

理由、それはこの世界の誰かが異世界への移動を可能にするというバカげた開発に成功したからだ。

そのお陰で各世界から集められた技術により警察一人一人に情報を管理もでき、武器としても利用できる携帯端末デバイスが配られ名称を警察から管理局へと変えた。

管理局の技術は最先端。

一端の探偵が技術の粋を集めたとしても到底太刀打ちできるレベルではない。

そして何時しか探偵という名は薄れていった。

そんな中、探偵所の玄関に一人の女性が立っていた。

純度の低いピンク色の髪をポニー・テールにした凛とした顔の持ち主。服装は管理局の制服を着ていることから管理局の者だと思われる。バストは見たところ。おっと女性が呼び鈴を鳴らしたようだ。

数十秒後現れたのは無気力全快の顔をした見るからに冴えない男。服装はボタンが全て開けてあるYシャツとパンツだけという地獄のような組み合わせ。

いや、Yシャツとパンツだけという組み合わせにはロマンを感じざるを得ない。しかしだ、それは着る人次第で天国にも地獄にも変わる代物なのだが、残念ながら今は後者の方だ。地獄絵図が展開されている。

「…よー借金取りー今日も相変わらず大きい乳だな」

「誰が借金取りだ! / / /

「胸が大きい事は認めるといつことか

「つむきーーーーーそれよりもさつさと服を着ろ! / / /

女性、シグナムは冴えない男、ガジルに背を向けて言う。ガジルはやれやれと首を振り、探偵所の中へと入っていく。そこでやつとシグナムは此処へきた目的を思い出したのか急いでガジルの後を追う。

事務所の扉を開けると、冴えないだらしの無い男が一人で住んでいるとは思えないほどに整理された玄関が広がる。

「入るぞガジル」

「上半身裸ですがどーぞ」

シグナムは一瞬と惑うも、事務所の中へ入る。入つてすぐの客間は広く、来客用のソファーが一つ、テレビ、大量に積まれた大人向けの雑誌等が置かれている。玄関同様綺麗に整頓されている。

シグナムは許可も取らずにソファーに腰かける。そこに服を着き、大人な雑誌を片手に向かい合いつつにガジルが座る。

「んでー、用件は?」

「いつもの事だ。さっさと管理局に入れ

そう、シグナムが此処へ訪れたのはガジルを管理局へと入局させるため。

もうこれで何度もになるか、返つてくる答えは全て同じ。

「断ーる」

「そうか…少し疲れた、珈琲を貰うぞ」

「待て。買つてきたばかりの珈琲がある。そいつを飲め

「なんだ、今日は機嫌でも良いのか?」

「お客様には優しくしないとな」

シグナムはこれまで一桁ではすまないほど此処へ来ている。
そのことから何時からか彼とは友人という関係になってしまった。

「ところでなんだがシグナム」

「なんだ？」

「管理局はどうして俺みたいな奴を入れたがってんのかね？」

「尤もな質問だ。

こんな朝っぱらから大人な雑誌を読みふけてる見た目からしてだらしの無い男の何処に需要があるというのか。

「古き象徴である探偵を消したいのかもしれないな」

「なるほど。んなー」としなくても勝手に消えるだろうがね

「むつ、探偵を辞めるのか？」

「今は止める気はねーよ。まつ、結果は時代の流れが運んでくるさ。
それともう一つ良いか？」

「なんだ？」

一人分の珈琲を持ちながらガジルはシグナムに質問する。

「”萌え”というモノについてだ」

「……萌え」？」

「ああ、最近ハマッタアニメについての掲示板に足を運んでな。そこの

〇〇たん萌え～、や～、〇〇たんはあはあ、等といつぱ葉を皿にしてな

その”萌え”といつモノがビオ～しても分からんのだが、意味を知らんか？」

シグナムは顎に手を沿え、考えてみるが答えが出なかつたのか首を横に振る。

「やうか…自分で調べておくかな」

「待て。結果が出たなら教えて欲しい、このままでは私の負けという形で終わつてしまつ」

ど一考えれば負けになるのかはこの際放つておく。

珈琲を飲み干したシグナムが席を立とうとしたとき、呼び鈴が鳴つた。

ガジルはシグナムを手で制し、立ち上がり玄関へと向かつ。

「…新聞ならお断りッツー？」

玄関を開けたガジルの目に飛んできたのは絶世の美女。

普段此処に足を運んでくるのはシグナムか飲み仲間のおっさんか新聞配達のおっさん。

だが何用で此処へ来たのかが問題ではない。

此処に見知らぬ美女が来たのかがガジルにとつては重要極まりないことだ。

一瞬で冴えた目、瞬時に服装をただし片手に持つた大人向けな雑誌を事務所の中へと放り込む。

「どうしましたか？」

もしかしたらアレなのかもしれない。
ガジルのことが好きだけど恥ずかしくていつも声をかけられず物陰から見守ってくれている可愛い子ちゃんかも知れない。
という有りもしない可能性を絶対の事実と確信しているガジルの声には貼りがある。

「実は…その…／／／」

美女の顔が紅潮して行く。

…ガジルが異様に興奮しているが可哀想な結果にしか転ばなさそうな雰囲気。

「なんですか、緊張しないで、気持ちの整理をしてから来てください。

俺は…待つてますよ、この身が朽ちてなくなろうと、未来永劫…貴女を待ち続けますよ」

「なんだ…いつもに増して気持ちが悪いな」

「台無じじゃねーかツ！」

どこか不機嫌なシグナムの出現によりガジルの幻想は某右手にぶち壊された。

まさか女がいるなんて…私は遊びだったんですね…？？？？？？

という展開がガジルの頭の中で構築された途端、ガジルはいつものだ

らけた表情に戻り、事務所に投げた大人向けの雑誌を取りに戻った。

「それで何か用ですか？」

いつの間にかシグナムが接客をしているがガジルは気にせず雑誌を読みながら珈琲を酌む。

酌み終わると珈琲を美女の前に置き、ソファーの腰かける。

「実は…相談したい」とあります

その言葉を聞いた途端にガジルの目つきが一瞬鋭くなる。
誰もそのことに気づかないまま話は進む。

「なんですか？良ければ管理局の方でお話を聞きますが

業務妨害をされているはずが、ガジルはシグナムを止める事無く美女の目を見続ける。

その瞳は普段の彼からは想像もつかないような目。

「あの…管理局の方ですか？」

「はい」

「あの…」の事は…その…」

「シグナム」

美女が言葉に詰まつた途端、ガジルがシグナムを呼び止めた。

「どーやら、この人は俺に仕事を頼んでいるらしいぜ」

ガジルの言葉を聞き、美女は首を縦に振る。

「で、何の用だ？美人にはサービスするぜ。ただの犬探しじゃなさそーだしな」

「はい…実は陰湿なストーカーに追われていて…」

「…なにか分かる事は？」

「男性、それから身長は150ほどで、いつも仕事終わり、夜の九時ごろから…ずっと見られ続けられてる気がして…怖くて夜も眠れなくて…」

「ならコレに住所と、それから仕事場を教えてくれ」

それを持ったを入れたのがシグナム。

「ストーカー解決なら管理局の方でも行つていい」

「シグナム…ただのストーカーならこの人もとっくに管理局に言つてるだろつよ。

このストーカーは大分長いこと行われていて。化粧で隠しているが隈も酷い。

それに清潔な感じと手の切り傷、飲食店で働いているな…多分、レストラン。

見たところ最近出来た傷が多い。さては、犯人が大きく動いたな？」

「は、はい。確かにレストランで働いていて、最近ストーカーが私に直接電話で声をかけて来るようになつて…それから

「接触もした、か。じゃねーと容姿が分からんからな

美女は呆気に取られた表情で頷き、仕事場と住所を書いた紙をガジルに渡す。

「OK、任せられたぜ。今日の夜にアンタの住所近くで張る。なにかあつたらすぐに電話してくれ、これ電話番号。んじゃーな

美女はお願いしますと頭を下げ、事務所を後にした。

「さてと、腑に落ちないかねシーグナム」

「…まあな

それもそうだ。

こんなチッポケな事務所に頼むよか、技術の進歩した管理局に頼るのが普通だ。

「…依頼主は多分人見知りだろつ。やけに丁寧、言葉も所々詰まつていた」

ガジルは綺麗に飲み干されたコップを台所へと運ぶ。

「精神的な問題だろ？ これ以上見られたくない。それで頭が一杯なのさ。

もし管理局に頼つたなら依頼主も監視されそつだからな。だから基本一人な俺を頼つた。そんなところだろ？」

「だ、だからと書いて探偵に頼らずとも」

「だから精神的な問題って書いてんでしょうが。管理局に頼むのは金も時間もかかる。

その反面俺は時間もからず行動出来、美女にはサービスがモットーでね」

シグナムは言い返す言葉が見つからないのか、うつと唸る。

「…で、どうするんだ？」

「ん？ とつあえず朝飯食つてブラブラして、昼飯は外食だな」

「…外食？ 珍しいな？」

「依頼主のレストランさ」

「なら私も」

「来ても良いけど私服で来い。管理局の制服は目立つからなア」

「そんじゃ、とガジルは席を立つたシグナムに手を振り、三人分のコップを洗い始めた。

依頼NO.1 某青狸レストラン（前書き）

探偵もののハードルの高さに泣けてきました…
それにギャグも何もあつたもんじゃねーです

そんなこんなで今回はグダグダと、そして次回で依頼NO.1を解
決つて感じでやつていこうと思います
今のところ納得いかない部分も多いと思いますが、次回で納得のい
くような説明ができたらなーなんて思っています

それではどうぞ！

依頼№・1 某青狸レストラン

某青狸がCMを務めていそうなレストラン。
そのレストランに二人の男女が腰掛けていた。

一人は黙々と片手に持った大人向けの雑誌を読み続けている男、探偵ガジル・アルタレッタ。

向かいに座っている、ママーあの人変な本読んでるー！しつ見ちゃダメツ、の会話を聞き顔を赤くさせているシグナム。

「…私服で来て良かつた」

「だろ？ただでさえ目立つんだから」

「誰のせいだ誰の」

静かに挙手したガジルの目に手元にあるコップの中の氷を押しつけた後、シグナムは店内を見渡す。

そう、二人が此処へきた理由はただバカをやるために無い。

このレストランには今朝ストーカーを捕まえて欲しいと依頼してきた女性が働いている。

恐らく、犯人が姿を見せるのではないか、そういうた考まで来たのかはガジル本人でなければ分からぬところだが、私服で来いと言つたからにはそれしか考えられないだろう。

…目立ちまくつているが

シグナムは咳払いを一つして、犯人に悟られないように犯人らしき者を探す。

身長150代の男…見たところ店内にはいない…

「…お前も少しは探したらどうだ」

シグナムは未だ雑誌に食いついているガジルに言つ。
言いだしつへはガジルだ。いつまでもレストランで読んではいけない雑誌を破り捨てて自分も仕事をしたらどうだ。そんな気持ちで一杯だ。

「探すつて…なにを？いい男なら田の前にいるだろ？」

「……は？」

「いやだから、いい男」

「…いやいや、此処に来た目的は」

「久しぶりにレストランつて単語を見たらレストランに来たくなつちやつた。なんか勘違いしてゐみてーだけどよ、この俺が働くとでも？」

正論。思えばガジルは一言も”レストランで犯人を捜す”などと言つていない。

「まあ、お前も日々仕事熱心でさぞストレスも溜まつてゐるだろ？
からなと私服で呼んだ。まつ、デートつてことで」

人生初のデートがこんな男と…なんと災難なおっぱい魔人さん。
その満更でもない顔でなければ深く同情していただろうが…。

「おっ、来た来た」

ウエイトレスが料理を運んできたので雑誌を読むのを止め、自分の前に置かれた料理へと視線を注ぐ。

ガジルが注文した品は、ライス（超絶特盛）、味噌汁、焼き魚、サラダといったつて健康的なメニュー、その反面シグナムの注文した品は、ライス、ハンバーグ、スペゲッティー、ミートボール、オレンジジュース、一体何処へ向かおうとしているのか。

「…お前、健康つて言葉知ってる？」

「いただきます」

シグナムは合掌をし、ハンバーグと共に運ばれてきた人参をガジルのライス（超絶特盛）の上へ全て放り込む。

単なる嫌がらせなのか、はたまた人参が嫌いなのか、後者の方であると非常に微笑ましいが前者の方であれば普ツリと来てしまいそうな勢いで人参の他ピーマン等をライス（超絶特盛）から味噌汁に変える。

「…あの、シグナム」

「な、なんだ？」

「…何故こんな嫌がらせを？なんか悪い」としたか？心当たりがありすぎて困るんだが…」

「い、嫌がらせ？違うー！口々グータラ過ごー」しているお前はきっと野菜を取つていなさそうだからな、わ、私なりの気遣いだ！」

「…主に野菜がメインなんだが

「うるさいーー太るぞー！」

「…体脂肪率は1も無いぞ」

「うつ…いいから食べろ…」

少し膨れた表情でハンバーグを口にするシグナム。

ガジルは自分の料理にばら撒かれた野菜たちを見て気づいた。
よく見ると野菜が文字を作っている。

『入局』と見えないことも無い。まさかこれを狙つたのではないだ
ろうか？

先ほどから表情の変化が激しい。食事をしている今でもビジネスモ
ードに入っているとでも言つのか？

「今は仕事なんてほつとけよ」

「ん？何か言つたか？」

「なんでもござらんよー」

ガジルは呆れた表情でライスを口にする。

次に魚、塩味が香ばしい。

次に味噌汁。多少余計なものが入つているがこれまた美味。
美味なはずだが、ガジルの眉が一瞬寄せられる。

視線は味噌汁から厨房へ、この角度なら厨房の置くまでは見えない
が入り口付近ならよく見える。

「…ガジル？どうした？」

ガジルの異変に気づいたのかシグナムがガジルに語りかける。

もしかしたら嫌いだからガジルに食べてもらおうと味噌汁の中に放り込んだ野菜が何らかの変化を起こしてガジルの体に悪影響を与えたのではないか？

ここへ来てやつと罪悪感に襲われたシグナムは骨まで食われた魚があつた場所にミートボールを一つ置く。

「ん？いや……ちょっとなー……ん？どうしたんだコレ？」

ガジルは自分の皿に置かれたミートボールを眺める。

ミートボール……ガジルの脳内に食事中にハシタナイ！モノが浮かぶも、シグナムに限つてそれはない、と違うものを連想する。

丸い……。 ”？

さつきの入局の文字とあわせると

入局。

……なんだこれはステに入局済みという意味か？

「…肉も食べる」

「…サーイエツサー」

シグナムと食事を進めていく中、ガジルはまた味噌汁を口にした後、厨房の中を覗きこむ。

「ふむ……」とかわいらしい

ガジルは空になつた皿を綺麗に整え、雑誌の方に集中する。食事が終わつたのかシグナムがガジルに話しかけてきた。

「ガジル、これからどうするんだ？」

「ん？ そつだな、食後の散歩でもいくか」

「そんじゅ よろしく頼むぜおいつさん共…」

「チクショー！ テメエは美人ちゃんとデートか！ ？ 隅に置けねエー
なアーフ主！」

食後の散歩にはひつそり最悪な公園の奥にあるビニールシートで作
られたテント。

ガジルはその住人と笑い話を済ませ、テントの奥にいるシグナム
のもとへ戻る。

「おつ悪い悪い。時間かけたな」

ガジルは不機嫌全開なシグナムに謝罪をし、公園を歩き出す。

「全く…こつもこんな所にいるのか？」

「暇な時によ」

怒りより呆れの方が大きいだろ？

普段は仕事がなくダラダラし、暇となればホームレスと談笑。
ここまで来るとその残念を褒めてやりたいほどに残念だ。

「はあ……それで、次は何処へ行くんだ?」

「シグナムどつか行きてー所あつか?」

「……」うつ時はお前がエスコートするものだぞ

「……残念な俺がテートしたことあるじでしも?」

「……すまない。……あー……行きたいところがあるんだが」

「何だね?」

「ふむ……これも中々……」

「……」

その後ガジルたちが足を運んだのは一軒の店。
ピンクオーラ充満の喫茶店なら可愛げがあるが、ガジルは店内を見渡す。
目に飛び込んでくるのは鉄鉄鉄。
匂いは油と鉄の臭い。

シグナムが一度行つてみたかった所とは、武器型デバイス部品売買

所。

腕に自身があるデバイスマスターたちがそれぞれ店を出し、商品を買つたり売つたりする所だ。

「最近出来たらしいんだ。一度訪れたいと思っていたが、まさか口レほどまでとはな」

シグナムは鼻息を荒くしながら店を見て回る。

彼女の戦闘への興味は人並みはずれてい。

数ヶ月前の知り合いからの電話でそのことを知ったガジルだが、まさかこれほどまでとは。

「流石バトルマーニア……同じや模擬戦ばかりつて噂は本当だつたか……本当に仕事してんのか?」

「う…………していゐるだ

「……なんか、目立たない簡単な仕事して後は戦闘につき込んでいそうだな……」

「バカを言つたな!しつかりと仕事をこなしているだらつ!」

「……ほほ毎日俺んとこ来て暇潰すのが仕事か……管理局は随分とお暇なようで」

「黙れ残念!毎日がグータラの貴様に言われる筋合いは無い!」

「るせえ!一ート侍!」(しつとら見えない所で仕事してんだよ!)

「誰が!一ート侍だ残念!貴様もこの光沢が放つ真の輝きを知らんの

だろ？！

「んだとーちよつとテメエのデバイスみせて見ひー。」

望むところだとシグナムは自身のデバイス、レヴァンティンを武器形態にシガジルに手渡す。

受け取ったガジルは、ほうと声を漏らし、レヴァンティンを隅々まで見る。

「どうだ！』

「…良い手入れだが、残念だつたな』

「お前にだけは言われたくない』

「うるせー！…つたく、いいかシグナム、お前はこれで満足かもしれないが、俺は満足できんな。確かにこの刀身は素晴らしい、しーかしだ、鞘はどうだ？』

ガジルはシグナムの手に握られている鞘に目を落とす。

鞘は美しい刀身からは想像もつかないほどボロボロで、汚れも目立つていた。

「ツ…これは『

「お前は次に『カレーを零したんだ！』…といつ

「カレーを零したんだ！…ハツ！』

「フツ、どんなに美しい刀身だろうが、それを取める鞘がそれでは

なア～」

「ハハ……」

「ま、俺は大人だしー弱いものイジメは出来ないんで俺の負けつてことでいいよ。うんいいよ。綺麗綺麗美し過ぎて目がドッカンしちまいそーだなー」

ガジルは半端ではないほどイラつかせる笑みをシグナムに向け、近くの店の商品を見始める。

己がデバイスの美しさ（？）を認めてもらえなかつたシグナムはレヴァンティンをギュッと抱き寄せ下を向く。ガジルは流石にやり過ぎたかと思ったのか、店主に何品か注文し、シグナムのもとへ行く。

「ま、まア鞄はボロボロだけど」これを使えばチョチョイのチョーイだから！元気だせよ！」

「……なんだ急に…さつきまであんなに……」

「え、ええーと…そだーシンハレだー」

「……本当に残念な奴だな」

「じゃかしいー！」

やけに上機嫌なシグナムと別れを告げた後、ガジルは一人探偵事務所の窓から道行く人の顔をボンヤリと眺める。

普段は何もないただの通路だが、夕焼けの時間には陰で道に絵が出来、残った部分は茜色に染まる。

これが気に入っているのかガジルは鼻歌混じりに天井を見上げる。片手に持つてるのはいつも大人な雑誌ではなく、一枚のメモ。メモには依頼主がストーカーの被害にあつた時期とレストランで働き始めた時期が記されていた。

「…後は管理局がどー動くかだよなア…」

何しろ”犯人”には切り札がある。

管理局が”犯人”を捕まえたところで”犯人”は切り札を使って事なきを得るだろう。

「ふあー…久しぶりに体動かすことになりそうだな」

メモを折りたたんでゴミ箱に投げ入れ、ガジルは大人向けの雑誌を片手に事務所を出た。

依頼N.O.・1 解決と新たな依頼（前書き）

依頼N.O.・1 解決！

改めて事件を振り返つてみましたがシヨボイ！
こんな調子で大丈夫か？大丈夫じゃない問題だ。
ちょっと刑事ドラマ借りてきます

依頼№・1 解決と新たな依頼

午後九時。

地を照らしていた太陽はとつぶに寝静まり、暗闇が支配する時間帯。そんな夜道を一人の女性がやや早歩きで進む。

その女性は今日アルタレッタを尋ねた依頼者。

急ぎ足なのは氣のせいではない。

この夜道に、もう一つの氣配がある。

女性はこの氣配に気づいている。

これまで何度も管理局に相談したが、解決されずに今では全く話を聞いてくれない。

解決する術が彼女には無い。確実に恐怖が迫っているといつに誰も味方をしてくれない…してくれたのはある人だけ。

依頼主は頭に浮かんだ男性の顔を振り切り、歩く速度を上げる。すると、後ろから迫つているはずの氣配がふと消えた。

何があつたのかと振り返ると、依頼主の視界にコートを着た180を越える身長の男が立っていた。

暗くてよく確認できないが、今日依頼を聞いてくれた探偵さんどうと判断し、笑顔で会釈して家へと足を進めた。

依頼主が急ぎ足で家へと帰宅したのを見届けたコートの男は、被っていた帽子を取り、依頼主がコートと思つていたビニールシートを脱いだ。

「あー、良い仕事したわい。これやるだけで金くれるなんて、良い

キャラしてやがるぜ坊主」

男…ガジルが昼頃あつたホームレスのおっさんは手に持つた酒瓶に口をつけ空を仰いだ。

遠くにサイレンの音が聞こえる。

「管理局さんも大変だなー、そんじゃワシは帰るとしますか」

「くそッ…ビーなつているんだ！」

暗い部屋、一人の男が誰もいない部屋で一人叫び声を上げる。確実に近所迷惑で訴えられるほどの声の大きさ、だが誰も注意する者もいない。

「なんなんだ！聞いていいぞ！また彼女が管理局に頼んだなんて！”僕は何も聞いていないぞ”！お陰で写真を撮ることも出来なかつたし触る事も出来なかつた！！」

「だらーなー、俺が言つなつて言つたんだから」

誰もいないはずの部屋……店内に男の声が響く。

瞬間、まるで狙つたかのように店内の電球が一つ光、声の主をガジルを映しだす。

「へへ、このクリーミーマンゴー天丼超絶特盛五人前よろしく。… 店長」

男の顔が、今日ガジルたちが昼を過ぎしたレストランの店長の顔が驚愕に歪む。

しかし店長は汗を流しながらもすぐにいつもの営業スマイルへと顔の形を変え、ガジルに言つ。

「お、お客様、当店は夜の営業を禁止としていますので、お引取りを」

「いやいや、後五分もしたら出るよ店長。いやー…犯人さんの方が正しいかな」

ガジルは行儀悪くテーブルに腰をかける。

「ス、ストーカー？ なんの事を言つてるんですか？」

「水でも飲んで落ち着けよ。誰もストーカーなんて言つてないだろうが」

ガジルは片手に持つた大人向けの雑誌に目を移す。

新刊なんだろ？ガジルのリアクションが何時もよりも新鮮だ。

「…彼女は何度も管理局にこの事を頼んでいたらしいなー。まあ以前は相手にされていたが、今じゃ全く相手にされていない。んで俺思つたんだがよ、ミッドーの技術力を持つ管理局がたかがストーカー如きに遅れを取るかね」

「さ、さあ…」

「惚けんなつて。依頼主は気が小さいほうでな。こんな事が続けば誰かに愚痴りもしたくはなるさ。で、その相手がアンタだつて訳だ店長。安心して話せる相手つてことであんな美人に目を付けられるとは羨ましい限りだが、アンタはそれを逆手に取つた。上手く話を進めて彼女が”管理局”に訴えたかどうかを知つた。後はアンタの思うが尽だ。彼女の勤務時間と住所電話番号等を知つてはいるアンタならストーキングなんぞ余裕だつたろうな。：今日飲んだ味噌汁、変な味がした」

「…………」

「俺の連れが入れた野菜で初めは良くわからなかつたが、ほんの少し、ほんの少しだが鉄の味がした。きっと彼女また手を切つたんだろ。オカシイよな、彼女の唯一安心できる存在のアンタが見守つてやつてるのに、恐怖を感じるなんて。ビーセヤラシイ目で彼女事見てたんだろ変態野郎」

雑誌を読み終わつたのかガジルは雑誌をテーブルに置き、テーブルに備え付けてあつた手拭で鼻血を拭き取る。

「まあ管理局に見つかつた所で、アンタは”店長”つづり肩書きを使つて事なきを得るだろがよ。あ、今の会話しつかり録音してあつから変な言い訳出来んぞ」

ガジルは自分の手の中に納まつてはいる音楽プレーヤーを店長に見せ、再生してやる。

店長。これが犯人の最大の切り札。

店長という肩書きを使えば彼女に忘れ物を届けに来たとでも言えれば

事なきを得る。

店長は顔を俯かせ、肩を震わす。

「確かに… それが僕の”切り札”だ… だけど、まだ”隠し玉”が残っている」

「違法デバイス、だろ」

またも店長の顔が驚愕に歪む。

店長の後ろに回した手が持つていたのは剣型のデバイス。

「最初、彼女が管理局に連絡を入れたときアンタがどー管理局を振り切ったのか。彼女がアンタに報告した? いー や違うね。最初は誰しも気のせいだと思う。しかもこのご時世。局員なんざ腐るほどいる。軽い頼みだらうが気のせいだらうが引き受けてくれる管理局がよ。んで、何処からか知らんがどつかで手に入れた局員のみに配られるはずのデバイスを民間人が持つという違法のデバイスで証拠になるものを全部パーにした」

「… 知られたからには仕方がありません。お客様、ご注文を確認します。”死”以上でよろしいでしようか!」

店長は気が狂つたかのように剣を振り回しガジルへと迫る。そんな店長を見たガジルはガツカリしたように肩を落とし、腕を組む。

「デバイスは優秀だが、使用者がド素人だとなあ… あーあ、準備体操してた俺がバカだつたぜ」

ガジルの頭を狙つた店長の横薙ぎの一閃。

ガジルはそれを体を仰け反らせギリギリのところで避け、両足で店長の体を蟹挟みにした後、ガラ空きになつた顔面へと頭突きを浴びせる。

仰け反つた店長を足で突き飛ばした後、ガジルは静かに立ち上がる。

「まあ戦闘は雑魚以下だが、ストーキングは一流だつた。だが惜しいなー、俺に頼んだ彼女のセンスが抜群つてことだらうなアンタの敗因は。…まあーなんだ、言つてやるとしたら」「

ガジルはカウンターに置いてある容器の中の水をコップに注ぎ、冷たい水を飲み干す。

「残念だったな」

ガジルの逆鱗に触れた店長はサッカーボールにでもなつたかのよう
にガジルに顔面を思いつきり痛快に殺さない程度に蹴られる。

店長の体が宙を舞い、近くの四人用の席に泡を吹きながら綺麗に着地した。

「ありがとうございました」

翌日、探偵事務所のソファーで依頼人が深く頭を下げていた。
もちろん謝罪などではなく、感謝の念を籠めて。

「どーいたしまして。次からは気をつけるんだぜ。後、またなんか厄介事があつたら俺にいいな。話は聞くぜ」

「はい！本当にお世話になりました！」

依頼主を見送ったガジルは事務所の中へ戻り、不機嫌そうにソファーに腰かけるシグナムに言ひ。

「ホームレスのおっさんを一晩泊めてあげてありがとうございました。管理局さんよ」

そう、昨日依頼主の家の附近にいたガジルに協力したホームレスのおっさんを勘違いで逮捕。

管理局は容疑者にも優しくベットまで使わせてくれた。

これがガジルとホームレスの契約。

ガジルが金と一晩寝床を上げるから協力しろ。

「…まんまとお前の掌で踊つていたというわけか管理局も」

「依頼者も犯人もな。依頼者には俺を見ても絶対に挨拶するなど言つてあつてだな。昨日の夜追われていた彼女はそのことを忘れちまつたんだろうよ。ま、それで寝床を確保できた訳だが。改めてありがとうよ管理局殿」

「つるさいー貴様も犯人から残念な奴だと思われていたくせにー！」

「ツーーんだとおっぱい魔人！揉むぞゴラアあー！」

「逮捕だ逮捕！…とつとつ頭まで残念になつたか残念男！」

「その残念男の掌で小躍りしてた奴は何なのかねー…あー…一ト侍か！」

「黙れ残念不純下品鈍感男！」

「そこまで言つたか泣いちまうだろ？がー！」

「あつ……すまん」

「…」じつも言ひ過ぎた

突然現れたとても居心地の悪い静寂。

その静寂を切り裂いたのは此処へ来た本来の目的を思い出したシグナムだった。

「忘れるところだつた。ガジル、管理局「入らん」…違う

いつもと違う質問にガジルはシグナムを見つめる。

「管理局と協力して欲しい…」

「……なんで？」

「今回の事件で犯人が使用していた違法デバイスについてだ

「…何か分かつたのか？」

「ああ、今捜査をしてるが中々尻尾を出せば。そこでお前」「

シグナムはどうせ断られるだろ」と俯いていたが、いつもの即答が返つてこない。

見るとガジルは眉を少し寄せ何かを考えているようだった。

「断る。…と、言いたいところだが。俺の仕事はこの町の揉め事を一軒でも解決する事。

今回の事件も違法デバイスが成功させた事件にも等しい。だったら俺の答えは一つ

「一つ

「本当か！感謝する！」

「俺に依頼しろ」

「……本当に残念な奴だな。」「」で素直に協力してやると言えればお前の株が上がつていただろ」「で」「

「うつせ！大体なんで俺が管理局にボランティアしなきゃなんねーんだよー！」

「揉め事を解決するためだろ？」「

「うるせー管理局は別じゃーーー管理局にボランティアするぐらいだつたら自分で捜査してるー！」

ガジルは叫び散らした後雑誌に手を戻す。

叫び散らした後だが体は素直なようで気づいたら鼻血が出てる。

「じゃあ依頼するー！」

「…報酬は？お前金あんまねーだろ？」

ガシルは鼻血を拭き取りながら言った。

「金ならあるが、

「嘘付け、家事全般がダメなお前が管理局の制服をここまで綺麗にアイロン掛け出来る筈ねーだろ。俺が見るからにどっかの誰かんとこに居候していると見たね」

「うう……じゃ、じゃあ……わ、私でいいだ!」――(世話的な意味で)「

珍しくアタフタとしているガジルにシケナムは攻め寄る。

「どうだ、お嬢さん。」

「いやーでも付き合ってもいらないんだぜ俺たち。お、俺もお前は欲しいけど…こやいやそうじやなくて…そこまで残念じやないかーもぢりんお前が嫌と言つては

頼むガジル！私にはお前が必要なんだ！」

勘違い。
圧倒的勘違い。

シグナムの言い方もそうだが、ガジルの反応は残念すぎる。普段の余裕は何処へ行つた？実家に帰つた？やかましい。

「ふ、不束者ですが… ど、ビードよろしくお願ひします」

「？……契約売ア」という意味か？良かつた… よろしく頼む」

「一体この二人は何処へ向かおうとしているのか

そしてガジルの元にやつてきた新たな依頼は何処へ向かおうとしているのか

依頼No.1 解決

依頼N.O.・1 解決と新たな依頼（後書き）

ホームレス
「あれ？ なんでワシ捕まつたの？」

シグナム

「取り調べは明日行いますので今日は此処でお眠りください」

ホームレス
「…5年と3ヶ月ぶりのベッド…ほんと、揃ぐれモノじゃが良いキ

ヤラしてゐぜ坊主」

依頼N.O.・2 ハッ氣むんむん娘（前書き）

依頼N.O.・2と云うことは何ですか？も、この話はまた後半に出でます
な予感が…
タイトルに関してはノーコメントでお願いします
決して私がMと云う訳ではありません。それではどうぞ

依頼№・2 Sシ 気むんむん娘

管理局 都市クラナガンの中心部にある本部を中心に全世界に建ち並ぶ組織。

四人の少年少女はその都市クラナガンに新しく建設された部署、機動六課の廊下を歩いていた。

「ねえねえティア、今日つて確か…」

肩まで伸びた青色の髪を持つ少女 スバル・ナカジマは隣を歩く同僚のオレンジ色のツインテールをした少女 ティアナ・ランスターに語りかける。

「ええ、例の人物が来るらしいわね」

「例の人物？」

ティアナの答えにスバルの隣を歩く赤髪の少年、エリオ・モンディアルが問う。

「誰ですか？」

「なんでもシグナム副隊長が六課建設前から入局を頼んでいる人が、此処機動六課に顔を出すらしいって話」

「キュルクー」

エリオの問いに答えたのはエリオの隣を歩くピンク色の髪を持つ少女、キヤロが答える。

そのキャロの頭の上に乗つてゐるのは龍フリード。

「へー、シグナム副隊長が… 一体どんな人なんだろうね?」

“探偵”よ

「え?”探偵”?まだやつてる人がいたんだ…」

そこまで希少価値の高い探偵。

一体あの残念はどのよつにして生活をしているのだろう?..

「一昔前は探偵が治安を治めてた感じだよね?」

「私達が生まれる前からじこですけど…」

キャロが興味深そうに言ひ言つ。

キャロの年齢は10、ちなみに隣を歩くエリオと同年代。
別世界への移動を可能にした技術が生まれたのは20年前。

「そうよね… 実際、探偵なんて見たこと無いもの

「その分楽しみだけどねー」

…何事も過度な期待をするものではない。

例えば注目のエロゲを寝れないほど楽しみにして発売当日購入後、
すぐさま機動してみて一通りプレイして「うん…まあ、ゲームだか
ら、うん」

みたいな反応になるより、あまり過度な期待をせず一発購入後、
すぐさま機動してみて一通りプレイして「やべつー! 眠れない夜
が続く!..」

のよつた反応をした方がいい筈だ…多分。

「あ、うん。…だからちょっと化粧を…//」

「あ、うん。…だからちょっと化粧を…//」

顔を紅潮させるティアナ。

確かに16には似つかない色っぽさが出ている。

何故実の兄に色仕掛けをするのかは人権に関わる問題なのでこの際放つておく。

廊下を抜けた四人の目に飛び込んで来たのはホールに整列した同僚の皆様。

自分たちが遅れていると気づいた四人は一目散に指定の位置に並ぶ

「皆さん、おはよつばっせこまーす！」

『おおはアアアアア…』

機動六課最高責任者、部隊長八神はやは並んだ隊員達に挨拶をする返ってきた無駄に活気のある声に頷きながら今日集まつてもらつた理由を話す

「今日皆さんに集まつてもらつたのは他でもありません
六課建設前からシグナム副隊長が協力を頼んでいる人物が今日、こ
こ機動六課に来ることになりました！」

『おおオー！』

弾けるはやての満面の笑顔。

返つてくる新鮮かつ太い声、ホールはもはや小さなアイドルのライブ会場のような空気が充満している

「それじゃみんな行くで～？」

『HEY!HEY!イラッシャイツ!HEY!HEY!オキヤクサ
マツ!』

何処で練習したお前等？

そんなツツコミが飛びそつたほどに見事なかけ声、逆にこれでは入りにくい。

ホールという会場はステに盛り上がっている。
その空気に完璧についていけない客人。

ホールシーン…のような事に成りかねない。

無駄に洗練された挨拶に応え、ホールへと続く扉が開く。
現れたのは大人向けの雑誌を片手に持った無駄にガタイの良い残念
ことガジル・アルタレッタ。

緊張の色を全く見せずに場が冷めることも全く気にせずに威風堂々
歩くところはいつもどうりだ。

服装はタンクトップとハーフパンツという軽い格好。

ガジルはそのままトコトコと雑誌に目を通しながらはやての横に立
つ。

「なあ部隊長、こんなのどう思つ?」

「セクハラですか？そんな事よりー…日本片手に登場したガジル・
アルタレッタさんの紹介やで！それでは～ガジルさんよろしゅーな
！」

はやてはキラッ つと星が飛ぶような回転をし、マイクをガジルに渡す。

一同の期待の籠つた視線がガジルに降り注ぐ。

「探偵。協力つて形だが連絡入れるか入れないかだと思つんで俺の事は忘れても構わん。

以上質問は?」

『ハイツー!』

「なんだ隊員A?」

『その手に収まってるのはもしかして『Sシ 気むんむん娘』の最新刊でありますか!』

「正解だ。ちなみにこれは先週ア〇ゾンで購入した限定版だ。定価は1280円。付録はなんと限定版のみにDVDがついている。しかしこれに気づくとは、隊員A、いい趣味を持つているな? 今度酒でもどうだ?」

『へへへ、ガジル氏も中々のじ趣味をお持ちのようだ』

「質問は以上か?」

「ねえ…ティア』

ガジルの紹介を聞き終えたスバルは隣に立っているティアナにそつと耳打ちする。

「… 淫く残念な人だね」

「… そりゃ 「そこ」… 残念って言つたなー」… そりゃ

まるで高校デビューに失敗したかのような雰囲気がホールを包む。残念この上無い紹介をされた隊員達のテンションは見る影も無く低下していく。

「そんじゃ

ガジルはマイクの電源を切り、そのままマイクをはやてに渡しこの場を去り足を進める。

はやては苦笑いしながらマイクを受け取り今日の任務を隊員達に伝えようとマイクを握ったとき気づいた。

マイクの電源が切られていることに。

オカシイ。マイクの電源自体を切る事はオカシイことではないのだが、”管理局専用マイクの電源の切り方を知っている”ことがオカシイ。

このマイクは魔力と呼ばれるエネルギーで動く代物。

通常このマイクの電源はその魔力を切る事で落ちる。

先ほどはやてがガジルにマイクを渡した際も、予めマイクに魔力を入れてガジルに渡した。

この魔力自体は限られた人が持つものではなく、必ずと言って良いほどの確率で人が持つもの。

だがこの魔力をコントロール出来るようになるには管理局で学ぶ必要がある。

「どーなつとるんや…」

余計な疑問を振り切り、マイクに再び電源を入れようとしたとき、

また気づいた。

”マイクの電源が手動で切られてある”ことに魔力でマイクの電源を切ることは容易いものだが、手動となれば困難だ。

外見的にはいたってシンプルなマイク。しかし中身は複雑で、手動で電源を切るのにはやはり管理画面で学ぶ必要がある。

「……皆さん！今日の任務はなーー！」

はやては腑に落ちないまま任務を伝え始めた。

「ガジル」

鼻の下を伸ばしながら廊下を歩いていたガジルは、凛とした声で呼び止められた。

声の主はシグナム。何事かとガジルは振り向くと、目に映ったのは機嫌が悪そうなシグナムの顔。

「なんだ？」

「なんだあの挨拶は？」

「普通の挨拶だろうが」

「残念な挨拶だ。まつたく…主はやての顔に泥を塗るよつた真似だけはしてくれるなよ」

「主?あの子騎士だつたのか?」

騎士。管理局に属する傭兵戦を得意とする聖王騎士団の一員。ちなみにシグナムも聖王騎士団の一員だが、彼女の場合特別にはやて直属の騎士、とこづけになつてゐる。

「あの若者で主か…良い逸材だなー」

「ああ、可憐さもなうだが家事全般をこなす器の大きな傭兵の主だ」

「なるほど、お前は主様の家にお世話をこなすといふことか」

「うう…それは騎士として主を守るために」「シグナムさん」……お前は

シグナムは声のした方向に振り向き、声の主を確かめる。

声の主は管理局の制服に身を包んだオレンジ色の青年、ティーダ・ランスター。

「じつしたティーダ?…じつして六課に?」

「いえ、探偵の方が此処に来られると妹から聞いて」

「ああ、それならそりゃ……ん?」

無い。先ほどまですぐ隣に立つていたはずのガジルの姿が無い。

何処へ行つたのかと周囲を見渡すも人影は見つからない。

「？おいガ『ガタゴトツ』…」

物音が聞こえた天井を見上げると、通気口が開いてあつた。

「…また面倒な事を。ティーダ、お前はホールに向かえ。今主はや
てが説明をしているところだ」

「はい…」

「どうした？何かあつたか？」

「いえ…昔の先輩が…あ、すいません。それでは失礼します」

ティーダはシグナムに一礼してホールへと向かつた。

「は…だから嫌なんだよ、管理局に来るのは」

ガジルは大きな溜め息を吐き、先ほど頂いた違法デバイスに関する
資料に目を通す。

今ガジルがいるのは六課の屋上。晴天でそのまま寝たい気分だが、
それを使しながら資料に目を通す。

「ふむふむ、これまでで15件。最近になつて10件か…一気に増えたな

何度か調査に当たつてはいるな…成果は無し、か…
あの店長も違法デバイスを貰つたときに記憶弄られてたらしいから
な…現段階では調査は…」

何処からか出したペンで資料に書き込みを入れ、視界に広がるクラ
ナガンを眺める。

建ち並ぶ高層ビル。中央に見えるのは管理局本部。

「…変わつちまつたもんだな。此処も、俺も、何処も彼処も
皆足元ばつか見て歩いてやがる」

人が群がる通りを歩いている連中の大半は足元を見ている。
探偵が活躍していた当初は皆天氣とあれば空を仰いですれ違う人は
は元氣よい挨拶をし、人目につく所でバカみたいな理由で殴り合い
をし、それを余興に酒を飲んでいた。

「確かに、足元を注意して怪我を防ぐことは大切だが、
たまには上向いて歩かねーと、大事なもん忘れちまうぜ。なあ…」

ガジルは一人笑みを浮かべ、資料を風で散らばらない所に置き、非
常口から屋上を後にする。

その資料の一枚目にはペンで『残念だったな』と書き込まれていた。

依頼NO. 2 8は出来ません（前書き）

ああ…文才とセンスが欲しい…

最近涼しくなつてきましたが、お体にはお気をつけてください

依頼NO.・2 8は出来ません

機動六課

「今日の任務の内容は今問題になつたる違法デバイス流出の件についてや。

皆も知つともしかれんけど管理局のみに支給されるデバイスが民間人に渡ることや。

ティーダさん、頼むで」

はやては一礼してマイクをティーダに渡す。

ティーダがマイクを手に隊員達の前に立つと隊員達の中から黄色い声援が飛んでくる。

ティーダはそれを手で制し、違法デバイスの件について話し始める。

「この違法デバイス流出事件の担当になりましたティーダ・ランスターです

まずはこのデータを見てください」

ティーダが指を鳴らすとホールに巨大なモニターが現れる。

またもや飛び散る黄色い声援、目を?にしたティアナが異様に頑張つてているのは気のせいなどではない。

「これは違法デバイス流出事件の件数です。

ここ最近になつて件数が増えています。

と、いうことは犯人が活発に違法デバイスを普及していくことが分かります

これだけの件数であれば必ず証拠が出るはずです。

各分隊に別れ隊長の指示のもと犯人逮捕に繋がる証拠を掴んでください

『はいッ！』

凄まじい勢いで敬礼をした隊員達は各自解散して各自隊長の指示に
もとにチームを作っていく。

その光景にティーダは肺に溜まっていた空気を吐き、額に浮かんだ
汗を拭い取る。

（緊張した……）一いつ事をするのは始めてだつたからなア……
もつと、先輩みたいに貫禄が持てればな……後でアドバイスでも
貰おう）

ティーダは今頃ラーメン屋で腹を満たしている残念の後ろ姿を思い
浮かべながら自分も捜査に参加するべく隊員達のもとに足を進めた。

ラーメン屋

「ヘイツ！超濃縮豚骨ラーメン」

「ほほう……」つやまた

年季の入ったラーメン屋。

知名度こそは低いものの、安定した味と風味で一部の客に大人気の店。

ガジルの前に置かれたのはこの店のチャレンジメニュー。

濃すぎる味と油と量からクリアするには一筋縄ではいかない。お値段1500円。

制限時間内に食べきった者は金を払わなくてOK！

「しかし…最近物騒らしきなあ、ガジルの坊主」

「むああ、最近テレビで事件とか良く報道されてるからなあ」

「へへへ、うちが無事なのも坊主のお陰ってか！」

「全くだ。サービスぐらいしてもらいたいもんだぜといひで、最近変な噂とか聞いたことねエか？」

開始3分で残り三分の一のところまで食い終えたガジルは店長に話しかける。

店長は眉を寄せガジルの大人口向けの雑誌を読みながら答える。

「…最近、客に変わった奴がいる……」

「…ビートた奴だ？」

「リストラされたやら離婚されたやらでバカ酒飲む客に妙に優しく接する奴でよ…

食い終わる頃にや肩組んで店出て行く奴だ…いつか話さうと思つてたが…」

ガジルはラーメンを間食し爪楊枝で歯に挟まつた物を取りながら眉を寄せる。

「そりや、変な奴もいたもんだなア…特徴は？」

「…服は来る」とに変えてやがる。

だがよ、ただのラーメン屋の店長の俺でも分かるぐれえ変な雰囲気出してやがる

「…なるへそ、そんじや！」馳走さん

雑誌を奪い取つたガジルは流れるような動きで店を出て周りを見渡す。人通りの少ない道。華やかな所といえば近くに見える遊園地。

道行く者は皆二人組みのピンクオーラ全開カップル。

「…虚しいな」

ガジルは何処か遠い目をして電柱に止まるカラスを見上げる。

此処へ来た際は路地に数羽ゴミ袋を漁つていたのだが今はいない。

「…ふむ。ちと遅かつたか…一人で行つても虚しいだけだよなア…かと言つて行かない訳にはいかねエしよ」

「なにをしている」

大人向けの雑誌を片手にどうするか思案しているガジルの耳に凜とした声が響く。

ガジルはその声を聞き弾かれたように振り向く。

「シグナム！いや、会いたかつたぞ！
ハグしよつぜハグ！」

「……いつもに増して面倒くさいな……じつした急に」

声の主は私服に身を包んだシグナム。

「あり？なんでお前私服なの？」

「お前を探すためだ。管理局の制服に敏感だからなお前は」

「フツ……野郎が着るもんにや興味はない
俺が管理局の制服に敏感なのは角度を変えれば良い感じに逆三角形
が……」

「お前、今デバイス持つてるか？」

「デバイス？……そついえば……忘れてきたかもしれないな」

私服の彼方此方を探すシグナムだが、デバイスは見つからなかつた
ようだ。

ガジルは好機とばかりに微笑んでガツとシグナムの肩を掴む。

「シグナム！」

「な、なんだ急に……ま、まさか貴様つ／＼」

「お前、今デバイス無いんだよな……ただの女の子なんだよなア……」

「や、止めるつ！／＼そこまで飢えていたのか貴様つ／＼」

「嫌か？クツクツク…嫌だと言つても俺は無理やり連れて行くぞ…！」

「そこまで残念になつたかこの外道！／＼／＼見損なつたぞ！／＼／＼

「フハハハハハハ！なーんとでも言つがいいわ！行くぞ！」

「期待していた兄弟達。すまない。
この小説の上の方に15つて書いてあるだろ？俺は8にはイケない
んだ…」

「…誰に言つている」

シグナムがガジルに連れて来られた所はラブト…ではなく遊園地。
作者的にも心底残念ですが許してください。

「ところで、何故此処に来た？」

「ええ…『テートだろ常識的に考えて』

「そこまで暇はないのだが」

「ふんつ、強がりは止せ、分かつてゐるぜ俺は、お前が暇だつて事は

「誰が暇だ。私はこうしている今も仕事をだな」

「黙りなツンデレ。さうさと見て回るのも。

滅多に来れる場所でもね。」んだしよ

「五」

ガジルは大きな掌でシグナムの手を握り、歩き出す。

突然のことはシケナは大あく目を開けた。従ひながらほんの少し

たにナシリの手を握り返した

（なんだ……普段は残念だが、このことは意外と男らしいんだな……）

（ヤベー……女の二歳……）
豪勢いたのねめでじ
わーの

握り返されたしこれは先しかして任せたうじことだろ！？ オーワ…

アメリカンジヨークですか？

意味分からん！いや最初から意味など！僕等が生まれてくることに
は必ずしも意味があつてだからその（

… もはやいつまでも無い。」の男、残念である。

しかし、確実に今話題の人気スポットに接近している。
何もありませんしたー、という壮大な落ちは無くなつた。

数分無言で歩き��き行き着いた先は今話題の人気スポット。

”雄·刃·毛·夜·死·鬼”

此處は世界でも有名なお化け屋敷で、入った者の八割は意識を失いトライマになるという噂だ。

「ほひ……見せてもらおうか、お化け屋敷の性能とやら、を……？」

『氣づけばガジルの手は少し強めに握られていた。

どうしたのかとシグナムの顔を見ると、若干青ざめながら見えた。

「……シグナム、お前もしかして」

「ひ、違ひー断じて違ひーお化け屋敷が怖いとかではない！」

「……誰もお化け屋敷なんて言ひたくないんだが……」

「あ……ひ……ひ、違ひ」

弱々しいシグナムを見たガジルはニヤリと笑みを浮かべる。

「ほほひ……まあつか、才色兼備主はやてをお守りする騎士様はお化け屋敷が怖いとでも？」

「なつ！／＼＼＼＼＼＼、そんな事は」

「だア～つたら並ぼうぜ？ほひ、入る前からリタイヤしていく奴等が多いからすぐだぜ？」

「くつ……いいだろう。ただし条件があるー。」

「ん～？なんだ言つてみーる」

「…もし私が悲鳴を上げなかつたら欲しいものを買つてもいい。」

「上等。まあ、悲鳴を上げなかつたら、な」

ガジルは酷くムカつく笑みを浮かべ、列の最後尾に行く。
一人に順番が回つてきたのは列に並んで10分もからなかつた。
そこまで怖いのだろうか、試しに入り口の方を覗いてみると、昼間
のはずなのに鳥肌が立つほど薄気味ぐらい入り口。

建物について分かる事はそれだけ、ビル5回ほどのお化け屋敷が黒
い布で覆われているので一体どのような建物かは分からぬ。

「おーシグ！」

「……」

ガジルは思わず心底呆れた溜め息を零した。

今のシグナムの状態は目をコレでもかと閉じ、耳を両手でコレでも
かと塞いでいる状態だ。

完全にシャットダウンして自分の世界に入っている。
大量の剣とでも踊つているのだろうか？

そしてついに一人の番が回つてきた。

シグナムは相変わらずシャットダウンしきつた状態。

「入つた所に従業員が立つてますので」

「あ、はい。おー」「ラシグナムさつさと起きる」

「……」

仕方がないとガジルはシグナムにそっと語りかける。

「…怖いのか？無理して引っ張ってきて悪いな。

ビビしても、と言つのなら帰るが、ビビする？

「…怖くなビー。」

「〇〇行こうサッサと行こう」

負けず嫌いな性格を逆手に取ったガジルは耳を塞ぐのに精一杯だったシグナムの手を握り中へと入つていった。

「つぇるかむツツー！」

「ツツツツツー！？」

お化け屋敷に入った一人を待ち受けていたのは田玉が片方零れ落ちている従業員。

作業服が血だらけなつえ、凄まじい迫力が籠つた挨拶。

思わず叫び声を上げそつになつたシグナムはガジルの手を強く握りうづくまる。

「お一人ですか？」

「はい」

「それではこちらに」

「あ、目玉落ちましたよ」

「失礼しました」

一部を除き一般的な会話を済ませたガジルはシグナムの手を取り奥へと進んで行く。

中には日の光が入らず、支給された懐中電灯が無ければ何も見えない状態。

「…ほう、中々良い雰囲気じゃねーか

従業員も巧みだ。良い感じに気配を殺している

「そ、そそそそそそうだな」

「…嘘…『ブランザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア…』

一人の前に飛び込んできたのは、どうやって動いているのか綺麗に半分に分かれた人間。

断接面もまたリアルで今の運動で腸が零れ落ちている。

『アイタカツタデゼブラザアアアアアアアアアアアアアアア…』

『オレモダゼブラザアアアアアアアアアアアアアア…』

「人間、ああは成りたくないものだな」

「……もし、お歸り……が、極めつゝなあ……」

綺麗に兄弟をスルーした後、ルートに従い歩き、一人は大広間に出了た。

何處かの縊姫式の会場を思ひ浮かへる大広間

しかしテーブルも何もかまびらかにせりあがれており、落丁した

「うーむ、思つたんだがコレは恐怖といつか心臓を悪くするだけで
は？」

「さ、早く田舎へ……懸かる病院へ……」

えー、もう少しそう見て回るうせー

「なんで平気なんだ……天井から大量の生首とか首かもけたナースとか従業員が弾け飛んだり……」

「まあ、無駄にリアルだったわな。本物見た気分だった！」

……見たことあるのか？」

「どうだつたか。ま、今にも泣きそうなお前を見ているのもいいが、やはり美人はお天道様に照らされていないとな。これで最後にするか？」

ガジルの問いにシグナムは激しく頷きガジルの手を握り締める。
涙目 + 上田遣いという必殺コンボをモロに浴びたガジルは少し顔が
熱くなつたが、何事もなかつたかのように奥に進む。

「二の部屋は特に何も無かつたな」

ガジルは赤く出口と書かれたエレベーターの前に立ち周囲を懐中電
灯で照らす。

「はやく…はやくしろ…」

「おい止める。結構エロく聞こえるから」

ガジルがエレベーターのスイッチを押した瞬間、扉が凄まじい勢い
で開いた。

扉の心配をしながら入るガジルの後を急いで追うシグナム。

エレベーターの中はいたつて平凡。

良く見るような作りで明かりもついている。

安心したのか握りしめていたガジルの手を離すシグナム。

そんなシグナムを見ながらガジルは

「しかし……酷いことするなア…」

「な、なにがだ？」

「いや何でも」

スツ、と流れのような動きでガジルは自分の両耳を押さえる。

シグナムが何事かとガジルの顔を覗いつとした瞬間、エレベーターの壁が無数の手に突き破られた。

壁を破つた際に出来た生傷から鮮血と油が溢れ出る。電灯の色も赤へと変わり、全方位から女性の生々しい声が響き渡る。

「…………」

エレベーターの中でも表現できないうまの悲鳴が轟いた。

出口にたどり着き無事にお化け屋敷を通過した一人は近くのベンチに座っていた。

時刻はもう夕時、遊園地には何処か哀愁が漂つていた。

「いや～、楽しかったな～」

「…………」

「それにしても可愛い声で鳴きやがつて～このムツツリ騎士様よ～

「…………ばか、かえる」

「なんだ?シリトリか?」

シグナムはガジルに背を向けたまま無言で立ち上がり立ち去りうつする。

「送つていこうか？」

言つとシグナムの背中はピタリと止まり、また動き出した。ガジルは苦笑をし、後に続こうと立ち上がる。

するとガジルの足元にサッカーボールが転がってきた。

転がってきた方向を見ると一人の少年が手を振っている。

ガジルは微笑みながらサッカーボールを手に取り、少年へと投げる。

「さて、条件は十分。お仕事と行きますか」

ボールを見事キャッチした少年にサムズアップしたガジルは哀愁を漂わせながら遊園地を去つた。

依頼NO.・2 人が気にしてる「こと」を書くもんじゃない（前書き）

とこう事で依頼NO.・2終了です
しかしあれです。今回は何とも書きづらかった…
おかしくね？と思いつ方もいらっしゃると思いますがノーコメントで
(汗)
それではどうぞ…

依頼N.O.・2 人が気にしてることを言つもんじやない

「ティアナ！此処か！」

「はい！兄さん？」

人が全く寄り付かない裏路地。

散乱したゴミ袋。黒猫達からの敵意の籠つた視線が一人に突き刺さる。

「報告があつたのは此処で間違いないはずだが……」

「犯人らしき人は……」

二人は背中合わせになりながらデバイスを起動し慎重に奥に進む。先ほどティーダの携帯に『危険物を持った不審な人物が現れた』とラーメン屋の店長から連絡が入つた。丁度近くをパトロールしてた二人はすぐさま現場へ駆けつけたわけだ。

「……あれは？」

周囲を確認していたティーダの目に裏路地から去る何者かの姿が目に入った。

何処かで見たことがある背中だが、ティーダは迅速にその者を追おうと裏路地を疾走する。

すると、何かに躓いたのかティーダのバランスが崩れ、転倒しそうになつた。

「兄さん！大丈夫！？…つて」

兄の無事を確かめに来たティアナはティーダが躡いたものを見、目を疑つた。

ティーダが躡いたのは顔面にいくつものアザを作り、両足が完全にヘシ折られている、違法デバイスを持った中年の男。

「まさか…この人…！」

ティーダは急ぎ中年の男の私物品を漁る。

財布を中年の懷から取り出し、中身を確認する。

財布の中から身分証明書を取り出し、何者なのかと身分を確かめる。

「デバイスマスター……兄さん、この人前に話題になつた」

「ああ、デバイスを使用して別世界からの来訪者を傷つけてクビになつた男だ。

まさかこの男が違法デバイスを…逮捕する」

（しかし…問題は誰がコレをやつたのかだ…

無駄な傷が無い…顔に一発両腕に一発ずつの打で完全にしとめている…一体誰が…。

ん？…これは…メモ？）

ティーダは現場の片隅にメモを発見する。

（やだ…何か腑に落ちない兄さんもカツキヨイイイエエエ…／＼

はつ…ダメダメ！…トロけたらダメよ私…でもさつきの逮捕する、で

…完全にキチャッタ…

私も逮捕して欲しい……／／／だ、だめよ！ただの変態さんになつ
ちゃうじゃない！）

妹は一人自分と戦つていた。

遡る事5分前

「アナタ…人生に疲れていませんか？樂になりたいですか？
素直に答えて下さい…人は必ず心が沈むときがあるのです…そんな
とき、優しく手を差し伸べてくれる人が、アナタのそばにいますか
？」

「…………」

季節はずれの黒いロングコートを着た中年の男　　違法デバイスを
売却している中年の男は

一人の男を裏路地へと連れ込みそつと語り始める。

男の手口はこうだ、不安定な精神を持った者を誘惑する。
例えるなら麻薬。ただの麻薬などではない。即効性の麻薬。

「IJの世の全てを壊す氣はありませんか？我々と共に…」

「お断りだな。生憎と男と添い遂げるような楽しい趣味は持つてい
ないんでな」

目の前の冴えない男からの凄みの籠つた声が中年の耳の中で響く。

中年の男は冴えない男から距離を取り、売却予定の一丁銃型デバイスを構える。

「…管理局じゃない、アナタ何者ですか？」

「まず自分から、と言いたいところだが、俺はテメーのよつうな奴の名前は聞きたいとも何とも思わねーんでな。お互い自己紹介は無しとしようぜ」

今まで中年の男が冴えない男だと思っていた者 ガジルは中年の男を睨みつける。

「まさか、ここまで素人だつたとはな。まさか、こんな風に交渉を断つたら問答無用でその手に収まつている危険物をブッパナスのか？」

「…無論です。交渉に失敗したからには邪魔者同然ですから…殺す前に一つよろしいでしようか？」

「なんだ？」

「どーしてアナタは私の交渉に応じなかつたのですか？
アナタからは負け組みのオーラが滲み出でていたはずだ」

「アンタは足元を見すぎなんだよ…だから、前から来る危険に気づかない。

ざつとこの違法デバイス流出の資料を読んだが、管理局の追跡を全く許していなかつたよ

そこまでは良かつた。しかしだ、対象がどーにも分かりやすい。
対象は読んだところ恋人や仕事をなくした奴ばっかだ」

「…それだけの情報で私に接觸することは出来ませんが？」

「だから足元ばかり見てんだよお前は。

かつて管理局と絡んでたアンタなら、管理局がどーいったルートで犯人を引っぱたくか知つてんだろ？

管理局にばれないように、そばっかりしか頭に入つてねーからな。管理局とは離れて捜査を進めていた俺の存在に気づかなかつた」

ガジルは近くにあるゴミ箱の蓋の上に腰を下ろし、腕を組む。

「聞いたところによると、アンタはここいら辺で活動しているみてーだな

まあ近くにカツプルが集う遊園地もあるしな。そこに行つて、フЛАれてシヨツク受けてる奴に優しく接して違法デバイスを渡す。クツクツ…どうやらお前は俺とフЛАれた奴と勘違いしていたようだな」

そう。ガジルがシグナムを無理やり遊園地に連れ込んだのは犯人に餌をまくため。

しかしそれだけでは犯人は何らかの方法でシグナムが管理局である証、デバイスを所持しているかしていないかを見極め引いていた。

だが幸いなことにシグナムはデバイスを所持していなかつた。

そして決め手はあの別れかたとガジルが漂わせる殘念オーラ。

「フン、この俺に女の子に嫌われるようなことさせやがつて…

アンタの敗因は管理局ばかりに目が行つてターゲットの危険性を忘れていた事。

まつ、一言言つてやれることがあるとすれば…」

刹那、裏路地に銃声が響いた。

業を煮やした犯人がついに引き金を引いたのだ。

しかし犯人が引き金を引くことを分かつていたガジルは犯人が引き金を引く瞬間、足元に置かれたゴミ袋を蹴り上げ自身の身を隠し、弾丸を避けた。

「残念だったな」

完全にガジルの間合いに入つた犯人は一度距離を置こうと飛び退ろうとするが、ガジルがそれを許さない。

狂人の利き手である右腕に両掛けで蹴りを放つ

鎌を上げられたガシルの右足による豪快な一撃

犯人は成す術もなく躊躇をモロに食らい呆気になく右腕を折られてしまった。

「ひいつ！」

激痛と恐怖によりその場に倒れこむ犯人。

震える左腕で銃を構えるが、銃口がガジルの脅間を捉えた瞬間、ガジルの右足による薙ぎの蹴りにより腕は上げ、デバイスも壁に叩きつけられた。

「あ、ああ、なたに言われたくは」

ガジルの逆鱗にタッチしてしまった犯人の顔面に容赦の欠片も感じられない右拳が入った。

宙を舞う数本の折れた歯、鼻の骨が折れると同時に噴出す鼻血。顔を歪められた犯人は後方へ吹き飛び、蓋の開いたゴミ箱の中に綺麗に納まった。

「これはオマケだ」

犯人が入っているゴミ箱の軽く蹴る。

するとゴミ箱の中に納まっていた犯人が地面に転がり、その後を追うように大量の汚物シャワーが気を失った犯人に降り注いだ。

「…あーあ、ただ働きしちまつたなあ」

大きく口を開け欠伸をするガジル。

夕飯は何にするか、と冷蔵庫に叩き込んである食材を思い浮かべ献立を考える。

いつもの事だが、足取りが重い。

疲れて帰つてきても待つてくれる人もいなければ優しく接してくれる人もいない。そのうえただ働きだ。

「ん?」

気がつけば事務所の前、ガジルは一階に構える自宅を眺め、異変に気づく。

「誰かいる…」

いつも一人だけの家、しかし今日は違った。

何かがいるのだ。直接目で確認したわけではないが、気配に敏感なガジルは事務所から伝わってくる気配を完全にキャッチしている。

「何処のどいつかは知らんが、俺のH口本を盗もうとするなんざ大した根性だ。

野郎だつたら潰す。レディーだつたらペロペロしてやる」

ガジルは後者を期待しながら事務所の扉を開ける。

すると漂ってきたのはコグ臭い匂い…もしさとガジルは急いで事務所の中に入る。

「誰だ！？」

「…」口の台詞だ！人様の家を燃やそうとする不届き者は…つてシグナム？

煙が充満する台所に立っていたのはエプロンをしたシグナム。

その手にはこれでもかなほど真っ黒になつたフライパンとそれに焼かれた不幸な食材。

辺りも散らばつており、色々大変なことになつてゐる。

「…おかえり」

「…ただいま。つて何やつてんだ？」

「見ての通り料理だが？」

「嫌がらせの間違いでは？」

「むつ、人の好意を嫌がらせと言つのか」

「いや…だつて台所が…」

シグナムは足元を見る。

散らばつた調味料、割れた皿、不要な食材。

「…」れは、あれだ。副作用だ」

「なんだー？」てゆーか、何でお前がいんだよ」

ガジルは呆れた様子で窓を開け、換気扇を入れる。

すると台所に充満していた煙が晴れ、散らばつた台所が姿を現す。

「…」れは…ヤレヤレ…」

酷く疲れた様子でガジルは雑巾を何処からか取り出し、台所の掃除を開始する。

そんな中、申し訳無さそうなシグナムの顔を見たガジルは皿を一枚取り出しシグナムの前に置く。

「腹が減つてるんだ。早く盛つてくれ」

「しかし…」

「早く盛れ」

命令口調に変わったガジルの言葉に逆らえずに戸惑いながら皿に焦

げた料理を盛る。

料理を盛り終わった頃にはガジルの掃除も終わっており、台所が使用前のよつこなっていた。

「そ、食べよつぜ。腹が減つてゐるんだ」

台所を立ち去るガジルをシグナムは料理が盛つてある皿を持ちながら追いかける。

ソファーに座つたガジルはマイ箸を取り出しシグナムの料理を口にする。

「お前、料理初めてか？」

「…不味いか？」

「いいや、初めての割には良く出来た方だろつよ。俺の好みの味だ」

事務所に静けさが訪れる。

聞こえてくるのはガジルが料理を食べる音だけ。

「さつきの質問に戻るが」

静寂を切り裂いたのは料理を食べ終えたガジル。

「なんで料理を？しかもつづりで」

「それは……遊園地あんな別の方をしたから……その……」

「あ？なんだつて？」

「な、なんでもない！／／／寂しがってるだろ？と思つただけだ／＼」

「… そりがとうよ。

あーあー毎日『おかえり』なんて言つてくれればなー」

「へ？／／／毎日？／／／

（毎日『おかえり』…だと？それはもしや良く見る「俺に毎日美味しい味噌汁作つてくれ」という、 プッププロポーズのよつな／＼／＼）

「ああ、毎日だ

（疲れて帰つても誰も迎えてくれないのは寂しいからな）

壮大な勘違いをしているシグナムの携帯が鳴る。
こんなときに、と心の中で毒づき、携帯に出す。

『シグナムさん。違法デバイスを流出していた男を逮捕しました！』

「なに本当かティーダ！？」

電話をかけてきたのは氣絶した犯人を逮捕したティーダ。

シグナムがティーダの名を口にした瞬間、ガジルは皿を持って台所へと向かつた。

「お手柄だな

『… いえ、それが。何者かに氣絶させられていたところを発見して

…』

「…誰か分かつたのか？」

『それが…手がかりも無く。あつたのはメモ。書いてある内容は『コイツは三下の素人。氣を抜くな』とだけ…』

「まだ黒幕がいるといふとか…分かつたまた後で」

シグナムは携帯を切りソファーに踏ん反り返っているガジルを見る。

「犯人が逮捕されたそうだ」

「おつ、それはそれは。管理局は仕事が早い」

「そ、それでだな… // /」

「…どした？モジモジして？」

やけにモジモジしたシグナムは意を決したかのように言つ。

「報酬だ！私を貰え！（世話とか料理的な意味で）」

「ヴェエエエエエエエエエエえええ…？…そつていえればそつたアアアアアアアアア…！（もちろん【ズキューーン！】的な意味で）」

そう。依頼の報酬は（世話的な）シグナム。

勘違いしているガジルはアタフタと動き回り大人向けの雑誌を頭に被る。

（なんだ…この反応は？照れ隠しか？先ほど『俺好みの味だぜ…毎

日作ってくれ（キリシ』と言っていた… そうか、照れ隠しか。残念のくせに可愛いことこのものあるのだな）

（あ、そうじゅんーなにやつてんだよ俺！犯人をマリアナ海溝にぶちまけておけば良かつた！いや！決してシグナムのこと嫌いとかじやなくて！あああああ…どーすりやいいんだよ！？いざつて時に動けないへタレなのが俺は…！… そうだ…）

「ふつ、シグナム。まだこの事件は解決していない。
わつきお前等の会話を聞いたが、まだ黒幕がいるそうじゅねーか。
お、お楽しみはそれが終わつたあとで」

「…確かに」

シグナムはつまらなさかつたな顔をし、身支度を始める。

「あ、でも」

「なんだ？」

玄関に立つたシグナムは振り向く。

「たまには料理を作りにきて欲しいなー、と」

ガジルの言葉を聞いたシグナムは赤くなつた顔を見られぬよう口クリと頷いた。

依頼N.O.・2 人が気にしてる「」とを言つもんじやない（後書き）

残念「エロ本頭に被るつて、俺は変態か」

いやアンタは残^ル（殴

依頼NO.3 最近のN件の物騒で尋ね（前書き）

いつもお世話です。

最近熱中症が流行っているそつので、お体に何かお気をつけてください。
依頼NO.3となつましたが、今回は何時から何時まで違つたな
まいといでしょ。それでよろしく。

依頼№。・3 最近の子供は物騒で怖い

「エリオ、キヤロ、今晚なに食べよっか

「はい！ハンバーグが食べたいです！」

「あ、エリオ君私も！」

「うん、じゃあ今晚はハンバーグにしようか？」

「「はい！」

「キュルクー」

都市クラナガン。

そのクラナガンの街を一組の家族が和気藹々と会話を弾ませながら歩いている。

エリオもキヤロも家族に捨てられ、管理局でその事件を担当したフレイト・T・ハラオウンが身寄りの無いエリオとキヤロを拾つた。

普段は三人とも管理局で勤めているが、今日のような休日の日には予定が無い限り三人で楽しく過ごしている。

「あ、猫が」

「本当、こんな街中に…珍しい。飼い猫かな？」

三人の前方に、歩道で堂々と昼寝をしている猫の姿があつた。
周りの者全てを和ませるようなトロロンとした顔で昼寝をしている。

「触つても大丈夫ですかね？」

「フリーで、歯んじやダメだよ？」

「キヤルクー！……キユ？」

キヤロの頭の上に乗っているフリードに、電撃が走る。

新井 三八頭の「歌舞」一冊の序文の筆語

語るふじているのが角はがくがくて表紙の色も薄くなっている
身は…大きくは言えないがね縄を持つた女王様が写っているだけ
言つておひづ。

刹那、叫びと共に一陣の風が走る。

筋肉がんばりの如く唇剥をしていた猿の体をギリギリに剥ぎ落とす。ヤツチし、しかとスカートの奥に隠された秘境を目に焼き付ける。

「ちつ……ストッキングか……しかしいいものを見れたな。

全ては貴様のお陰だ。三月の田中さん家の突然行方をくらませた飼い猫。

某世紀末覇者の如く猫を持つた拳を突き出したガジルは暴れる猫にそつと微笑む。

「さあ、飼い主がテメエの帰りを待ってるぜ…
それとサンキューなそこのお二人さん。お腹一杯です」

いきなりの出来事に三人は呆気に取られ、ただ暴れ狂う猫を宥めるガジルを見つめることしか出来なかつた。

「いや～、ありがとね探偵さん」

「ハツハツハ！こんなもん朝飯前ですよ田中さん！」

「ふふふ、それじゃあね」

玄関で猫を受け取つた田中さんに別れを告げたガジルは「機嫌なのが鼻歌を歌いながら事務所の中へ入つて行く。

お疲れ様の一言をかけてくれる人物は今はいないが、夕時になれば買い物袋を手に提げ事務所のドアを叩くだろつ。

「…あれ？うちつてお料理教室だつけ？」

どうでもいい疑問が浮かんだことに苦笑しながらガジルはソファーに横になりテレビをつける。

「蜃ドラは好きになれんなあ……」

チャンネルを変えるがピンとくる番組は放送されていない。

「…久しぶりに見てみるか…」

ガジルがチャンネルを変えると、画面一面に『THE・管理局』の文字が映り、管理局の看板番組『THE・管理局』が始まった。一礼して今日の出来事を読み始める女性アナウンサー。

「…なんだ、始まった後にやる『今日の一言』なくなつたのか…あれ結構気に入つてたんだがなあ」

気に入つていた企画が無くなつていたことにショックを受けながら報道を見る。

この前の違法デバイス流出事件の犯人が捕まつたが、以前違法デバイス流出は止まつていないようだ。

「こんな早くに解決すりや問題になんねーだろ…」

ブツブツと言葉を発しているが画面の隅々にまで田を通すといひは職業柄からだらうか。

そんな中、客間に呼び鈴が響く。

「お、今日は絶好調だな
ハイハイ、イ今出ますよ~」

鼻歌交じりで玄関の扉を開けるガジル。

「あ、先輩こんにち」

ル。客人を見た瞬間、弾かれたように扉を閉め事務所に戻つてゆくガジ

「ちょー！先輩！僕ですよティーダですよー！」

「此処に居るのはMr.・超絶イケメン仙人だ！」

「そのフレーズは聞き飽きました！扉開けてください！」

「だあーーー！ せHエなッ！ 何の用だゴーラーー！ 勧誘ならシグナムで
間に合つてんだよサツサと帰つて近親相姦に身を委ねてやがれシス
ロンお兄ちゃんよ！」

「誰がシスコンですか！？いいですか僕は！」

「うぬセーラー服！俺はどつかつてーとお姉ちゃん派だから！妹派なら五一田の石田さんの体が興味心身だから語り合つて來い変態共！」

「アナタが言いますかそれ！？というか石田さんに謝つて！」

石田さんをも巻き込んだ口喧嘩。

訪問者 テイー・ダは溜め息を吐きながら扉をノックし続ける。
ガジルは意地でも出ないつもりなのか鍵を掛け大人向けの雑誌を読み自分の世界に入り込んでゆく。

「先輩！協力してほしい事があるんです！」

「他を当たれ。お門違いだ」

「依頼ですよ！」

「依頼拒否は出来る。俺は忙しいんだ」

大人向けの雑誌を読むだけの男の何処が忙しいのか。半ば諦めかけたティーダに、勝利の女神が微笑んだ。

「む？ どうしたティード、何か用か？」

凛とした声が玄関越しに客間に響く。

ジル

しかし全てが過かたが開け放たれる扉差し込む光と綺麗な手扉を思いつくり閉めようと考えていたガジルはその綺麗な手を傷つけるわけにはいかないと策を巡らすため一瞬動きを止める。

「入るぞ」

（フン！シグナムを先に入れ攻撃を防ぐつもりだつたようだなティーダ！だがそんな猿でも考えられる薄っぺらい作戦でこのガジル・アルタレッタが止まるとでも思つてゐるのか！

「出来ませんでしたー…」

結局抵抗する事が出来ずに…いや、軽くテコピンしお返しとばかりに飛んできた鉄拳を顔面にモロ浴びその隙に入られたガジルは酷く項垂れながらテ○リスをしている。

「あ、やつた40万」

地味に高い記録を叩き込んだはずなのに素直に喜べない状況。

「先輩」

「…ふ○ふよしょ」

「ガジル。お前のお気に入り全てに火が灯るぞ」

「何の用だ」

ガジルは渋々ゲーム機の電源を落とし、ソファーに踏ん反り返る。

「実はアナタに依頼するよう頼まれたんです」

「あ?」

ティーダが持っていたのは一通の便り。

それを受け取ったガジルは疑問に思う「とを口にする。

「…なんでもたヤヤコシイ事を…」

「ああ？偶然前を通りかかつたら十歳ぐらいの女の子が…」

「十歳か……ギリギリ、射程距離だ」

え？なに「トイツ？」のよつた視線を送られながら事務所の窓から外を見る。

「ティーダ、その電柱の裏に隠れてる女の子呼んで来い」

「あ、はい」

ティーダは領事事務所を出る。

それを確認したガジルは台所へ行きオレンジジュースと柿〇種を持つてくる。

「…鍵を閉めないのか？」

「ん？生憎との子からの依頼を断れるよつて出来ていないのでな

「むう…」

「なんだその顔は、もしかして閉めて欲しかったのか？」

「まあな

「え？何時に無く素直だなおい」

「料理を教えてくれると言つたのはお前だろつ

R-18を期待していたガジルは、まあこんな残念にそんな度胸があるとは思えないが、ちょっとぴり期待していたガジルのテンションは少し下がる。

それと同時に玄関の扉が聞く音が響いた。

「ぱつー止めるーアタシは別に会いたいなんてー！」

「でも連れて来なきや仕事受けなーって探偵さんが」

「誰がそんな事言つた誰が

無理やり事務所の中に入れようとしていたティーダの頭に拳骨を落としたガジルは赤毛の少女の前に田線を呑わせる。

「ヤ、取りあえず話は聞くぜ」

「誰がアンタみたいな奴に」

「お嬢ちゃんに言つていない…

おーいーそこのお嬢ちゃん！ちょっとこいつち来いー！」

ガジルが一言発すると、もう一人隠れていたのか、紫色の髪を持つ少女が顔を出し、ガジルの顔を確認するとトロトロと事務所の玄関までやつてきた。

「おー…確かに、ルーちゃんだったか！」

「ガジルおじさん？」

「お兄さんと言つておらうが。

せ、立ち話もなんだ、中に入つておるよ」

紫髪の少女、ルーテシアは「クリクリと頷き事務所の中へ入つてゆく。隣に立つアギトは皿を丸くしながらルーテシアの後を追い、『履物を脱ぎ捨て事務所の中へ入つてゆく。

「ふう……さて、もう用とやらは済んだらう。」

ホレホレ帰つた帰つた。可愛い妹が待つてゐるんだろう。」

「はあ……シシレイシマシタ。

あ、それと先輩」

「んだよ。告白以外なら聞いてやる」

「……そろそろ、戻つてきてもいいんじやないですか？」

ティーダは気まずそうに皿線を反らす。

「……翼を？がれた鷹は一度とあの空を翔けることは出来ん。まつ、案外地を這つとこうのも中々良いものでな……情けない話だが、俺は移り変わる空を見上げることしか出来ない」

少し喋りすぎたな、と後付しティーダの頭に軽く拳骨を落とす。

「空も、嫌いじゃなかつたんだがなア……」

そつ言い残しティーダに背を向け事務所の中へ入つていぐガジルの姿はどこか弱く儂かつた。

「ルーチャンお待たせ」

「死ねおつせん！」

「10秒遅れただけで死ねなんて…
最近の可愛い子ちゃんって怖いなー…」

ソファーにちょこんと座ったルーテシアは出されてあつたオレンジ
ジュースの入つた「ツップ」に口を付ける。
それを恨めしそうに眺めていた赤髪の少女 アギトの姿に気づき、
ガジルは台所からもう一杯オレンジジュースを持ってくる。

「で、どうしたんだいルーチャン。
まだ暗くなつてないから良いけど、夜になつたらアレだよ?喧嘩ば
つかしてゐるから」

本当に分かつてゐるのか、オレンジジュースを飲み干したルーテシア
は「クリと頷く。

「…ガジル。誰だこの子達は……まさかの時は即刻逮捕だぞ」

何故かエプロンをしたシグナムはガジルの隣に腰を下ろし、田の前
に座る一人の事を尋ねる。

「まさか、こっちの赤毛の少女は知らんが、こちうの紫の子は俺の昔の仕事仲間の娘さん。

良く遊んでやつてやつたからな、結構親しいぞ。しかし、俺の家を知つてゐるとは…

と、それよか本題に移りましょつかお嬢様方」

ガジルは懐に収めてあつた便りをルーテシアに返す。

「…何でまたこんな事を」

「…おじさんつて知つてたら、こんな渡し方しなかつた」

「え？ だけど看板にでっかく俺の苗字書いてあるじやん

「……」

「…もしかして、誰でも良いから頼みたくつて、そんなときあのシステムコンとバッタリ会い、丁度事務所の前を通つてたあのシステムコンが俺の所に渡した、と」

ルーテシアはコクリと頷き、便りを開ける。

ガジルに頼みに来たわけではないのなら、誰かのお使いか？

便りを開いて渡されたガジルは便りの内容を静かに読み上げる。

「えー何々。

『母上の命は預かつた。返して欲しかつたら二日後の午前2時に指定された倉庫に現金で30億持つてこい。もし管理局が関わつてゐる事が我々の耳に入つたら母上の命は無いと思え』

「……」

沈黙がオブラーートのように事務所を包み込む。
ガジルは無表情のまま大人向けの雑誌に目を通す。

「ルーちゃん、もう遅いから晩飯食つてけ。
後で家に送つてやつからよ。シグナム、一緒に飯を作りつ。
教えてやれるし早くできるし、一石二鳥だ」

「現実逃避をするな！命がかかっているんだぞ！」

現実逃避を計画していたガジルはシグナムの喝によつて無理矢理現
実に戻された。

「現実逃避もしたくはなる。こんなボロッチャイ事務所に命がかかつ
た誘拐事件？しかも30億？分かつてのとおり残念にそんな大金は
無い。」

「いやいやいや！俺にそんな金があると思つてんの？

「これは流石に管理局さんの仕事だろ！？」

「しかし…管理局が関わつたら母上の命がないと…」

「尚更だろ！」時勢だか何だか知らんが！」自慢の技術力で何とか「

ガジルおじさん」……」

目に飛び込んできたのは今にも泣き崩れそうなルー・テシアの顔。

「お母さん…」のままじや…」

良くここまで持つたものだと褒めてやりたい。

通常ならこの便りを受け取つた時点で何が何なのか分からずただ立

ち匂くし、次第には泣き出しているだろう。
しかしルー・テシアは耐え、助けを求めた。

恐らく、ルー・テシアを支えてくれたのがアギトだろう。
先ほども精神が不安定なルー・テシアに代わってティーダにこの便り
を渡し、尚且つ迷い無く事務所の中にまで入つてくれた。

「……レディーにサービスが…俺のモットーだ」

大人向けの雑誌を勢い良く閉じガジルは台所へ向かう。

「その依頼、確かに受け取つた。
ルーちゃんの母ちゃんには借りもあるからな」

言い終わると客間から礼の言葉が飛んでくる。
それに片手を挙げ応えたガジルの隣にシグナムが立つ。

「…どうするつもりだ」

「どーもこーもねーよ。

ただ助ける。それに順序は存在しない。助けたという結果だけがあ
るだけだ。

言つておぐが、今回の俺はマジだぜ。誰にもお前にも、残念なんて
言わせねーよ

「…そんな柿〇種がビッシリついた顔で言われても…頭から残念じ
やないか」

「やかましい…」

依頼NO.3 夜の街は危険だから歩くな（前書き）

更新が遅れ申し訳ないです…

言い訳になるかもしませんが、毎日毎日朝早くから仕事で手が回らない親父の代わりにアラホラサッサと……帰つて来る頃には辺りは真っ暗ボディーは限界…

もうボディーチェンジするしかないです…

ホント、私は戦闘描写が酷いです…

さらには次回で全ての疑問を解決という…期待している方は少ないとは思いますが、精一杯頑張らせてもらいます

それでは、どうぞ

依頼№・3 夜の街は危険だから歩くな

「カツコをつけてみたものの…どうすつかなー…」

ガジルは一人大人向けの雑誌を楽しみながら、クラナガンの街を歩く。

天候は雲一つ無い晴天。嵐の前の静けさにも似た空気が流れている。

「もはや探偵じゃなくて便利屋になってる気が…あ、この娘胸デカくなつたか？」

本当にどうでもいいことを呟きながら都市を歩く大男は何時管理局に捕まつてもおかしくないほど不気味で異質だ。

そもそも何故クラナガンの街をぶらついているかと言つと、簡単に言えば証拠探しだ。

管理局が関われない以上、今のガジルに手がかりというモノが無い。

今ガジルが向かっているのはルーテシアの母、そしてガジルの友人であるメガーヌの家だ。

メガーヌの家は管理局が関わっていないので犯行現場がそのままになつてゐるはず、犯人が証拠隠滅のミスを犯していればの話だが、その場合重要な手がかり入手出来るかも知れない。

「…ま、そう簡単に手に入れれる訳ねーよなア……」

ガジルの視界に広がつたのは何度か訪れたことのあるメガーヌの家の玄関。

綺麗に整えられた靴棚。犯人が侵入した形跡は見当たらないが、床に溜まつたホコリと靴棚の上に置かれている花瓶の水が少なくなっている事からメガーヌの家には誰も侵入していないことが分かる。

ルーテシアとアギトはあれから事務所でシグナムの世話をなつているはず。

合鍵を貰つたガジル以外に侵入した者はいない。

「これはこれでおかしな話だな」

合鍵を使用したということは鍵が掛けられていたということ。
誰が？メガーヌは恐らく部屋の模様からして何の抵抗も出来ずに捕らえられた可能性が高い。
と、ということは鍵を掛けれるのは犯人のみ。

「…ふむ」

一通り家全体を調べてみたが、玄関も含め進入の痕跡は見つからない。

「ここまで完璧に進入するたアー、管理局が調べても分かるかどうか」

ルーテシアの話を聞くには家にいるはずのメガーヌからの応答がないことに気づき、急いで家に戻つてみたところ、便りを何者かに渡され拳動不振のルーテシアの所にアギトが来た。

「……此処には何も無し、か。
あるいはアップルパイだけか…」

心当たりを探そうにもルーテシアには分かる事ではない。
参った参ったと咳きながら玄関に戻るガジル。

「なら、いひちも調べ方を変えてやるだけだ」「

「なあ、ルールー」

「なに?」

事務所の来客用のソファーに寝転がっているアギトは、事務所の奥にある部屋から持ってきた本に田を通すルーテシアに話しかける。

「本当にあのおっさんに任せて大丈夫だったのか?
探せばもっと良い人もいるはずだらう」

誰もが思つ質問だらう。

「探しでもおじさんほど良い人なんていない。
昔からおじさん、私の願い事は絶対に聞いてくれるから」

「でも……」

「ママも、おじさんは凄い人だ、って言つてた」

「ふーん…」

ルーテシアの言葉からは嘘を感じられないものの、アギトは未だ半信半疑だ。

アギトからすればガジルは、ただ喧嘩が強そうな変な奴、の認識が九割だ。

「何を話しているんだ？」

「あ、シグナム」

アギトはソファーに座りつとじているシグナムのために身を起こす。

「あの変なおっさんたちちゃんと仕事をするのか？」

「変なおっさん? ガジルのことか?」

変なおっさん呼ばわれされているガジルの顔を思い浮かべ思わず吹きだしそうになるシグナム。

「だつて全然シッカリしてないし」

「分からんこともないが…仕事はしっかりしてると思つぜ。私が知る限り依頼はちゃんとこなしている」

相槌を打つたアギトはぎこちない動きでシグナムの膝を枕にして再び寝転がる。

「へへへ、女人の人ってこんな感じなんだ」

「なんだ、膝枕は初めてか？」

「ううん。膝枕はアタシがお世話になってる人に何度ももらつたことがあるけど、女人にしてもらつるのは初めてなんだ」

「……母親は？」

「いない。気がついたら田那のそばにいたんだ」

「…すまん」

「いいよ。だつて田那は少し年取つてゐるけど、此処のおっさんより凄くカッコよくて、シックカリしてて、凄く優しいんだ」

得意げに話す顔には笑みが浮かんでいるものの、どこか寂しげな色も混じつてゐる。

そんなアギトの頭をシグナムはそつと撫でながらアギトの話を聞く。

「ねえ、気になつてたんだけど」

「なんだ？」

「シグナムとおっさんつてどんな関係？」

「恋人？もしかして、夫婦？」

突然頭を撫でる速度が上がつたことに気づいたアギトは何かあったのかとシグナムの顔を見る。

シグナムの顔は今にも火を噴きそうなほど真っ赤になつている。

「ど、どうしたの?」

「い、いや……ア、アギトはどうちだと思つた?／／／

「うーん……夫婦かな?

だって合鍵とかも持つてたし、おっさんの扱い方慣れてたし、買い物
帰りだつたし……」

「……………そ、うか／／／

「で、どうちなの?」

「それはだな……その……「ただいまー」ーーーの話はまた今度だ!
／／／

「で、手がかりは見つかったのか?」

「んー?んー」

まだ顔が紅潮しているシグナムは寝転がりながら大人向けの雑誌を
読んでいるガジルに話しかける。

「いやね、手がかり云々は関係ねーんじゃねーか

「は？犯人の身元が分かれば対抗策も…」

「犯人は侵入の痕跡一つ残していない、アブナイ連中だつてこつた」

ガジルの手の抜きように思わず拳を握り締めたシグナムだが、ガジルの視線の先が大人向けの雑誌に向けられていないことに気づく。視線の先にはルーテシアを元気付けようとしているアギト。

「…どういうことだ」

「……さあな…お前はあの子の傍に一緒にいる。今日はあの子達を泊める。お前も泊まれ」

「…一応聞くが、お前はどうする

「フツ、夜の街を歩くのも一興。

注意しておくが、あの子の前では…」

「何も喋るな、か？」

「いや、喋れ。

ただし俺のこと以外だ」

シグナムはガジルの言葉に疑問を覚えるも、いつもと口調が違うことと、ガジルの眼の鋭さに気づき、黙つたまま頷き、二人の所へ向かつた。

時刻は丁度午前一時。

海に面している工事現場にもはや人気はなく、静寂だけが漂つていた。

今宵は月の姿は無く、辺りを照らすはずの街灯も故障しているのか点滅を繰り返している。

そんな工事現場の先には一目で機動していないと分かる天井に穴が空き、波の影響で錆び付き、今にも崩れ去りそうな壁がある工場。その工場の入り口付近に門番のように立つ影が一つ。

「…誰だ」

入り口に立つ影が暗闇に潜む氣配を感じ取る。
もう一つの影は獲物、双剣を構え戦闘態勢に入る。

「いやはや、参つた参つた。
まーさか気づかれるとは」

静寂を切り裂くような笑い声を上げ現れたのは、サングラスをかけたアフロ頭。

一体誰なのか分からぬが、声からして十中八九ガジル。

何故こんな格好をしているかは謎だが、手に大人向けの雑誌を持つていないことから判断するにガジルも本気になつてゐることだろう。

「貴様…何者だ?」

「ただのイケメンだ」

ガジルが言葉を発した瞬間、獲物を構えた影がガジルに斬りかかる。雲の合間に覗かせた月が、月光を反射させガジルを切り裂かんとする双剣と、その主を照らし出す。

「ほひ、 可愛い子ちゃんじゃねーの」

ガジルは迫り来る刃を避けずに、両手で双剣の主、綺麗に伸びた栗色のロングヘアの女性の手首をしっかりと掴み取る。

「まーさかこんな可憐な子と出会えるとは… たまには夜の散歩も良いな。どうだい？ そこの子、 も！」

ガジルは掴んでいる手から一本剣を強引に奪い取り、連絡を取ろうとしていたもう一つの影が持つ端末へと剣を投擲する。

凄まじい速度で投擲された剣は見事に端末を貫き、そのまま今にも崩れ落ちそうな工場の壁を碎く。

「良い切れ味、 しかし脆い壁だ」

壁が崩れ去ったと同時に迫つた拳を後方に倒れるように体勢を崩しながら避け、捕らえていた手を開放する。

すかさず距離を取ろうと、後方に大きく跳ぼうとしていた女性。しかし大きく跳ぶため振り上げた両脇にガジルの両脚が下から持ち上げるようにして捉えた。

体を支える足の代わりに両手を地面につき、倒れる勢いと両足の力を使い、両脚で捉えた女性を後方へと文字どおり、飛ばす。

その隙を突いたもう一つの影は、体がくの字に曲がったガジルに腕から現れた刃で切り裂こうと腕を振り下ろす。

「よつ」

しかし瞬時にガジルはその体勢を崩し、片腕で全身を支えながら左脚で影の刃に触れないように腕を受け止め、更に右足で左脚が受け止めた右腕を刃に触れないよう第一関節に巻きつける。

そして余った腕で宙を舞う女性が投擲した剣の柄をキャッチし、自由な左腕で振り下ろされた刃を逆手に持ち直した剣で受け止める。

「はつ」

体を支えていた右腕を曲げ、右腕の力だけで体重100近くの自身の体を宙に浮かせる。

その際絡めていた足を解き、相手の右腕を支えていた左脚を伸ばしきり相手の腕を弾き宙を舞う。

「そらつ」

宙を舞つたまま左手で握り締めた剣を、故障した街灯の根元へ投擲する。

壁を崩すほどの威力を持った剣はアッサリ街灯を切り裂き、支えが無くなつた街灯は、先ほどガジルが押さえつけていた紫色の髪を持った女性に向かつて倒れる。

「チツ」

追い討ちをかけよつにも倒れてくる街灯を防ぐ手段が無い。

そう判断した紫色の髪を持つ女性はガジルから距離を取り、栗色の髪を持つ女性と並ぶ。

「ハツハツハ！いいねエ！

必死になつて俺を始末しようとしてゐたア、あの工場に何かがある訳だ！」

「…それがどうした」

「いや悪い今の嘘。

本当はあの工場に何も無いんだろ？…」

「……」

「ダンマリか…まあ良い、今は楽しもつち…」

ガジルは普段からは思い描けないほど邪悪な笑みを浮かべた。

依頼N.O.・3 酔っ払ったまま玄関で寝るな（前書き）

…爪剥がれました…しかも一気に三枚… もよなら僕の左足… O-rz
さて、鬱なまま書かせていただきましたが、この事件もN.O.・2の
ように後々物語と関わっていきます。

それから次回は本編の方が40万PVとのことでこちらの方で番外
編をやらせていただきます。

無いとは思いますがリクエストなどがあればどうぞ

それでは依頼N.O.・3をどうぞ

依頼№・3 酔つ払つたまま玄関で寝るな

月明かりが照らしたガジルの邪悪に満ちた笑みに戦慄を覚えながら
々武器を構える。

「そうバツチリ身構えんでも良い…俺はレディーにはかなり優しいからな。

その美しい体には傷はつけないよ」

そう言葉を発すると、ガジルは徐に手をアフロの中に突っ込み、何かを取り出す。

「食」ひいての生態構造学

ガジルは「」寧に「お手製」と書かれた煙玉を地面に投げつける。激突と同時に三者の視界を奪う煙、否、コショウが瞬時に一帯を覆つ

「逃がさな、くしつ！」

「ふはははははは！個人的にはもつと君達と遊びたかったがア！
残念ながら先約があるんでなア！そんときやもつと仲間引き連れて
一緒に遊ぼう！」

サアアラアアバアアー！と辺り一面に皮肉な声を発し、ガジルはすぐ隣に見える海へ、近くにあつたドカンを投げ捨てる。ドカンは水しぶきを上げ、けたたましい音を響かせる。

「海へ逃げたつひやむ！」

「追うつぶつ！」

二人は目に入った「ショウを涙目で取りながら海に落とされたドランをガジルだと判断し、海へ飛び込む。

「……なんか和んだなー」

やたら不規則な形をしたサングラスはこれを予想していたのか、コショウが晴れるとサングラスを外し大きく息を吸う。二人は何処まで行つたのだろうか、海面に影はなく、静かな波が押し寄せている。

「セーー、ビーゆー」とか説明願おうか

ガジルはアフロを外し、今にも崩れ去りそうな工場の奥に立つ紫色の髪をしたルー・テシアに良く似た女性、メガーヌに問い合わせる。

「……」

「やっぱり、何もなかつたな。人質なんて何処にも……安心してくれ、事前に監視カメラ等は弄らせていただいた」

ガジルは警戒した様子もなく工場の中へと入り、天井に取り付けられたある五つの監視カメラを眺める。

「今あのカメラに映つてんのはお前だけだよ」

「…あの一人相手を猫のように扱つて、監視カメラも操作してただ
なんて

流石は”暴れ雲”あの頃と全然変わらないわね。でもちょっと残念
オーラの量が増えたんじや…」

「やかましい！何が悲しくて久しぶりの再開をツッコミからはじめ
にやならんのだ！」

メガーヌは静かに、懐かしむように言つ。

その穏やかな表情からは敵意も、捕らえられていた面影も感じない。

「久しぶり。三年ぶり、かしら？」

「ああ、まーさかこんな形で会つことになるたアな
さ、話してもらおうか？」

ガジルはボロボロになつた椅子に腰かけ、じつとメガーヌを見る。

「ま、その前に俺の予想言わせて貰つても？
合つてたら今度なんか奢れよ」

「フフフ、相変わらずね。

若い頃を思い出すわ」

「ハツハツハ！冗談！俺もお前もまだ若いだろ」

腐敗した工場には似つかない豪快な笑い声が響く。

「…全部、自分でやつたことなんだろ？」

勝手にお前の家に上がつたが、この事件に実行犯はいない。

証拠を残さず、抵抗の後を残さず、侵入方法を悟られず、そーなりやオテアゲ。

決定打は癖だな。お前は出かけるときは何時も靴棚を揃える「

「……」

「家にあつたアップルパイ、ありやルーチャんのだろ? 一口も食つてなかつたぜ。」

良い子に育つたなア、うちに来たときも心配心配つて顔してたぜ」

「それでも、あの子は変わつたわ

「ああ、確か、お前の旦那さんが亡くなつたときだな」

5年前、ルーテシアの父は交通事故で亡くなつてている。
家族で旅行していたとき、赤信号のまま横断歩道を渡つたルーテシアを庇つて。

「あの日以来、あの子は笑顔を見せなくなつたわ…」

「そこに現れたのが、あの人があの人が面倒を見ている同じ年くらいの子、アギト」

心を閉ざし、部屋に籠るようになつたルーテシアを解き放つたのは、他でもない、アギトだ。

近所に同じ年の子はおらず、友達、と言つてもたまに挨拶するだけの仲は手一つで数えられる程度。

「ええ、あの子が遊びに来るよつになつてからは、ルーテシアも元気になつていつたわ」

「……話が逸れたな。

お前が此処に来た理由は、何となくだが分かる」

ガジルは急に険しい表情を作り、落ちてきそうな電灯を睨みつける。

「……あの人何があつたのか」

「……」

目を伏せたメガーヌを見たガジルは、やはりな、と呟く。

「最初からおかしいと思つていた。何でわざわざ俺のここに来たのか。

いや、何で最初にあの人所に行かなかつたのか。

お前を助けようとしていたルーチちゃんを見つめたのはアギトだ。残念なことに俺はアギトに頼りない奴、と思われている。

じゃあ誰が頼りがいのある奴だ？ 答えは実に簡単、あの人だろ」

そう、アギトが足を運ぶのはルーテシアの記憶にあるガジルではなく、自身の世話をしてくれる方の方に足を運ぶだろう。

「じゃあ何故足を運ばなかつたのか？

簡単に、あの人がないから。

今頃アギトは優しく抱きしめられて寝息を立てている頃だろうが、本来ならあの人所にいるはずだ。

……調べて分かつた事だが、アギトの服にカメラが設置されていた

「変態つ！？」

「違う！いくら女と縁が無いからと言つて恩人の娘に手エだすか！」

「それ以外ならOKなのーー？」

「わーい俺のイメージ木つ端微塵」

そろそろ自身のイメージを変えなければマズイと確信したガジルは服装を整える。

「…犯人の要求は30億。

しかーしこの30億は犯人から見たら残念賞のよーなもんだ」

服装を整えたガジルは古びたドアを蹴り破り、出口を確保する。

「どうこいつ」と？

「…管理局に事が知れた場合、お前の命は保障しない。
そして監視役としてアギトが着いて来て、俺の事務所には良く管理局さんが遊びに来る。

つーこたア、犯人の目的は初めから30億ではない

「…まさか」

「そう、管理局だ。

管理局が手を出しているところをアギトに撮らせ、犯人側がそれを受け取り、電波妨害か何かでその映像を大きく放送、んでお前を殺す。まあ管理局のイメージダウンを狙つたわけだな。
アギトにやどーせ、撮れたらあの人を解放してやるとの条件をつけたんだろう。

「今回の一件、何やら大事らしいな。まつ、一言言つてやれるとし

たら残念だつたなぐらいか

遠くから微かに慌ただしい足音が聞こえる。

足音からして三人、そう判断したガジルはやれやれと疲れた表情を見せ立ち上がる。

「とりあえずお前はルーちゃんの所へ行つてやれ。
今回の事件の被害者はお前じゃなくてルーちゃんだ。
詳しい話は後でまた」

「…本当に隊長は無事なんでしょうね?
もし捕まつてたら、酷いわよ」

「なアに言つてやがる。

あの人があそ簡単に捕まる事なエだろ?」

「でもやつぱり「しつけHな!手エ引いてから一度も戦つたことね
エんだろーが、今のお前に出来ることは娘笑顔にしてやれることだけだ
けだろ」…ありがとう!」

メガースはガジルに礼を言つと、振り返り指を鳴らす。

それと同時に現れたのは黒い影。人間の形をしているが明らかに人間とはかけ離れており、その闘志も並々ならぬものを感じる。

「お願いね、ガリュー」

ガリューと呼ばれた黒い影は、その赤い眼でガジルを見つめた後、一礼をしメガースを抱き上げると先ほどガジルが確保した出口から外へ出、昆虫のような翼で夜空を舞う。

「…しかしまあ、面倒くさくなりそうだな。

違法デバイスと言い今回の件と言い、探偵が首突っ込むことじゃね
ーんだがよ」

工場の閑ざされていた扉が爆音と共に破られる。

現れたのは、眼帯をした銀髪の少女と強い目をした赤髪の少女、そして同じく赤髪の巨大な盾のよつたものを持った少女。

「チツ！遅かつたか」

「そこのおっさんにはタップリ落とし前つけて貰わねえとな……！」

「うー！また怒られるッス……」

現れた三人の、いや後ろの扉からやつてきた先ほどガジルが交戦した一人を合わせた五人の少女に向けてガジルは満面な笑みを浮かべた。

「フフフ……フウハハハハハハハハハハハハーッ！

美少女美少女美少女美少女美少女オオ！前言撤回探偵だが何だか知らんがア！たまには大事にも顔を突っ込んでみるものだなア！」

圧倒的不利に置かれたこの状況でガジルはそれだけで工場が壊れそうなほど叫び散らし、両手を広げる。

「さア！折角大事に首を突っ込んだんだ！
俺を楽しませてみろオ！」

布団の中で、ルーテシアと共にシグナムに抱きしめられながら寝ているアギトは罪悪感を覚えていた。

父のような存在を助けるため、友人を騙し、優しく抱きしめてくれる人を騙し、未だ帰宅しない事務所の主を騙したこと。」

「「めんなさい…」

無意識に放たれた言葉と共に、大粒の涙を浮かべる。すると、事務所の扉が強めだが丁寧に叩かれる。

それを聞いたアギトは一人を起こさないように素早く布団から抜け出し、玄関の鍵を開ける。

「えつ？」

アギトの目に飛び込んできたのは月明かりに照らされたルーテシアの母、メガーヌ。

どうして?とアギトは自分に問いかけながらメガーヌを驚きを隠しきれない顔で見つめる。

「なん……で?」

「変な探偵さんが助けてくれてね」

メガーヌはアギトの質問を笑顔で返すと、アギトの手を引き事務所の客間でシグナムと共に寝ているルーテシアのところまで行く。

「ルーテシア、ルーテシア」

メガーヌは愛しの娘の頬を優しく叩く。するとルーテシアは重い瞼を開き、優しく微笑んでいるメガーヌを見つめる。

「…ママ？」

「うん」

ルーテシアはメガーヌの存在を再確認するとアギト同様大粒の涙を浮かべる。

「ママ…ママ…！」

「うん…」めんね心配かけて…」

跳ね起きたルーテシアは涙を流しながらメガーヌを抱きしめる。メガーヌも目に涙を浮かべルーテシアを一度と離さぬよう強く抱きしめる。

「ママ…おじさんは？」

数分間抱き合つたルーテシアは、母を助け出してくれた探偵がいなことに気づく。

邪魔をしたら悪いと寝たふりをしていたシグナムも顔を上げメガーヌの反応を待つ。

「大丈夫、おじさんすぐ帰つて来るから」

「…「ん」

ルー・テシアは半信半疑のまま頷く。

メガーヌはルー・テシアの頭を撫で回した後、アギトに向きを変える。

「貴女も私も、守りたい人のために動いただけなのよ。
それを責めることなんて誰も、神様にだつて出来ないわ」

コクリと頷いたアギトはルー・テシア同様強く抱きしめられた。

「娘を助けてくれてありがとう」

翌朝

シグナムの不安は大きくなるばかりであった。

理由はとても簡単、未だガジルが帰宅していないからである。

「フフフ、どうしたのシグナムさん？」

そんなシグナムを見たメガーヌは微笑みながら話しかける。

「い、いえ…なにも…」

あんな残念でもこう帰つてこないと心配になつてくるもの。
正直今すぐにでも探しに行きたいのだが、それだと残された三人に
危険が襲い掛かるかもしれない。

「私達のことは大丈夫よ。
ガリューもいることだし」

客間でルーテシアと戯れているガリューに目を向ける。

「あの子は召喚獣つていつて、私達のことを守つてくれるの」

「ですが…」

「ほら、心配なんでしょう」

背中を押されたシグナムは頷き、急いで事務所の扉を開ける。
シグナムの目に飛び込んできたのは眩しい朝日、道を行く人々、事務所の扉の前で寝ているガジル。
その右手には酒瓶、左手には酒のおつまみ。

「…ん？アレ？何処だ此処？記憶喪失？いや此処は俺の事務所…あ、シグナムおはよう。

良い朝だな。お前の下着もこの角度ならバツチリだ」

五分後

「おじさん…本当にありがと…」

「おう…また困ったことがあつたら俺のところに来いよ…」

ガジルは案の定ボコボコにされ、一人の親子を見送った後、事務所

の客間に戻りソファーに座るシグナム一綺麗な土下座を見せる。

「…何か言つ」とはないか

「いや、その、実はですね、メガーヌ助けた後に五人ぐらいの美少女が俺に襲い掛かってきつてですね、その子たちと遊んだ後にすゞーく上機嫌でして、ホームレスのおつさんと、酒をですね」

「何か言つ」はないか

「すみませんでした」

何故謝らなければならぬのかと心中疑問に思いながらも深く土下座をするガジル。

やつと許す気になつたのか席を立ち、支度を始めたシグナム。ガジルは頭を搔きながらソファーに残されたアギトへと向きを変える。

「おつさん、全部分かってたんだよな

「なーにがだ」

「旦那がいな」ことや、アタシが旨を騙してた」と

「へえ、そうだつたのか。
酒のせいで記憶がないんだ

「嘘ばつか

「どうだつたかな…

後、旦那とやらはどーやら俺の知り合いでな、あの人気が帰つて来るまで俺がお前を引き取ること荷した」

「「はあ！？」

突然の告白にアギトとシグナムは大きな声を上げガジルに迫る。

「なんでアタシが変なおっさんの世話にならないといけないんだよ！」

「「」の変態！ そんなにも飢えていたのか… 逮捕だ逮捕！ // /

「原型止めてねーぞオイ、これは直しようがない。

ヘイヘイ決定決定。あの人気が見つかれば終わりなんだから我慢しろー、シグナムも妙に可愛がってたけど、こればかりは譲れんぞ」

ガジルはいつもの通りソファーに踏ん反り返り大人向けの本を見る。

「ダメと言つたらダメだ！」

「こんな変態と一緒に生活させたらアギトが変になる…」

「そうだそうだ！」

ガジルはワーウー文句を言つ一人に呆れ、止めを刺す。

「報酬」

「え？」

「だから依頼の報酬。ルーちゃんどつか行つたしお前が払え。

結構しんどい依頼だつたから高いぞ。

まさか無いと？おいおい、シグナムに頼らうつたつてそーはいかんぜ。

なにせソイツも金ないから、ちなみにうちは金払えなかつたら代わりに家の家事洗濯を任せてるんだ。はいコレでお分かりレディーズ。後サービス期限終了したから

有無を言わせず相手の手を全て叩き落したガジルは再び雑誌に田を通す。

アギトも流石に言い返せなくなつたのか悔しそうにガジルのスネを殴りつける。

そんな中、シグナムは意を決したかのよつて田を見開き宣言する。

「ならば私も此処に住む！／＼／＼

アギトが変な影響を受けないよつてこいつかりと見てやる！／＼／＼

「……はやてちやんカワイイソー」

「貴様アアアアアアアアアーそれは卑怯だぞオオオオオオオー！」

必殺技の前に手も足も出なくなつたシグナムは何故か涙を浮かべながら事務所を慌しく後にしてた。

アギトその後姿に手を振つた後、ガジルの腹の上に座る。

「…よろしく」

「おつ」

この事件が、管理局を大きく変えることを、
そしてガジルの運命を変えることを誰も知らなかつた

依頼ノ・3 酔つ払つたまま玄関で寝るな（後書き）

？？？「あのおっさん！許さねえ！」

？？？「でもあの人、少し優しかった」

？？？「え～やうつスか？ただのスケベ親父にしか見えなかつたつス」

？？？「かなりのやり手だつたな……私達がこいつもあつたつ、近くにあつた養豚所の藁の中に放り込まれるとは」

？？？「ああ……屈辱の極みだ……」

依頼N。・X パーティーには一人魔法使いを（前書き）

今日は記念話ということで番外編です
なんだか最近体が重くて仕方がないません… 病院に行つた方がいい
のか…
それと酷くどうでもいいのですが、仕事帰り小学生に足踏まれまし
た

依頼N。・X パーティーには一人魔法使いを

夏。此処アルタレッタ事務所の事務所に一人の女性がいる。一人はアイスを食べ、一人は事務所の主が買つてくれた料理の本を黙々と読んでいる。

どちらとも額に汗を浮かべ、事務所の主を待つ。

ゴミを捨てに行くと言つてからかれこれ20分。

始めは一人で会話をしていたのだが、聞こえてくるセミの鳴き声と部屋を涼しくするただ一つの道具、扇風機の音だけが響いていた。

「たつだいまー」

「「遅い」」

二人は事務所の主、ガジル・アルタレッタにピシャリと告げ、立ち上がる。

「すまんなア、新作が出てたもんで」

新作？と眉間に皺を寄せガジルを睨む女性、シグナムはどうせ趣味の悪い大人向けの雑誌でも買つてきたのだろうとガジルの手にある物に目を移す。

「…」Jさんは

シグナムは本に見覚えがあつた。
そう、確か今読んでいる料理の本の続編のよつなものだ。

「…あまり俺をミクビルナ、ミ」

ガジルはため息つきながら料理の本を本棚へ。
もしかしたら自分のために買つててくれたのではないか、という
考えがよぎるも、この男にそんなことが出来るのか?といつ考えに
押しつぶされる。

「そんなことより行こよー」

少し残念そうな色を見せるシグナムの服を、タンクトップを着た少
女、アギトが引っ張る。

「あ、ああ、すまない。

ガジル、用意は出来たか?」

「ん? おひ」

38 を越える猛暑、いやもつと暑くなるである。田にガジルは黒
のロングコートを羽織り、いつものように大人向けの雑誌を片手に
やつてくる。一体何処へ向かおつとしているのか…
信じられないが彼曰く、別に暑くない、とのこと。

「…ならば行くか」

「ふう……」

ガジルの視界に広がるのは青く輝く海、そう、ガジルたちは今海に来ているのだ。

此処に来た理由は一つ、またもや管理局、もといシグナムに依頼されたからだ。

内容は、あまりの暑さに仕事が進まない機動六課、その部隊長が打開策として海へ行こうと提案。結果、機動六課全員で海に行くことになった。

ガジルの仕事は、美人揃いの機動六課の女性の面々がチャラチャラした男にナンパされずに今日一日を楽しく過ごさせる。つまり、ナンパしてくる奴等を寄せ付けないようになります。

「お勤め！」苦労様です、先輩」

「……だアーレだ、てめえ」

「相変わらず凄いですね……」

此処に着くまで五回のナンパにあつたのに、全部一瞬で追い返すなんて

そう、此処に来るまで五回の襲撃にあつたのだ。

皆考えている事は同じで、折角海に来たんだから彼女作ろうぜ、のような考えを持つ男が多すぎた。

これもこの暑さのせいだろうか。

「少し睨んでやつただけだ

「その格好で睨まれたら……」

「アギトが行きたい行きたいと駄々を捏ねて、仕方なく受けただけだ。

海で遊ぼうなんて考え、俺にやない」

サングラスに黒のロングコート、メシャツに黒のジーンズ、ビーチサンダルを履いているとは言え、明らかに海とはかけ離れた服装。それらの上からも分かる筋骨隆々な肉体。

「ケツ、何とでも言いやがれ。

そら、妹さんが来たぞシステム。やーっと行け

「だからシステムじゃないと「兄ちゃん!」…失礼します」

満面の笑みを浮かべながら走り去るティーダを横目で見ながら、ロイツ本物なんじゃないかと思うこの頃。

ティアナが来たといつことは女性陣が来たといつことで、ここからが本番。

「いやーー海やなあーー」

「うんー田焼け止め塗らなーと」

「あ、私も」

和氣藪々と楽しむ機動六課各分隊隊長、そして部隊長。三人ともルックス、顔、どれも食えた男を誇つ。

「管理局の三羽鳥か

やれやれ、あの娘達をげつちゅつじょつとする輩は多そうだ

微かな、けれど強い雰囲気が浜辺に群がる男全員に広がる。ナンパ師の全員が、彼女達にターゲットを変更した気迫にも似た覚悟。

「ほう、その彼女を求める気迫、ナンパ野郎だろうが俺は敬意を払うぞ」

ガジルが三人の下に行こうとしたとき、ナンパ師の三人が動いた。一人はビーチバレーのボールをわざと弾き、一人はペットボトルの空を、そして一人は正面から堂々と。三人は目も合わせずに、互いのターゲットを確認して歩みを進める。

三羽鳥の位置も多少バラけたタイミングを狙い、ナンパ師は動く。

「やるではないか。

貴様等の魂、確かにダイヤモンド以上の輝きを発している。
しかしだなア……」

まるで某世紀末救世主伝説の無〇転生を使用したかのような動きでガジルはナンパ師の下に向かう。

転がつてくるバレー・ボールをフェイントより先にキャッチし、ペットボトルを持った男がなのはにぶつかる前にぶつかり、手に持ったペットボトルを弾き、ダストシュー。

「その子のお嬢さん。
帽子落としましたよ」

そしてすれ違い様にはやてから盗んだ麦藁帽を最後の一体がはやってに接触する前に、渡す。

三人の動きを完全に封じた。動けない。絶世の美女、話したくとも話せない。

「あ、おおきに。

なのはちやーん！ フヨイトちやーん！ はよーーー！」

「待つてよはやてちやん！」

「あ、置いてかないでーー！」

和氣藪々と去つていく三人を微笑みながら見守るガジル。

その後ろでは敗北したナンパ師の三人がガジルを睨みつけていた。

「…俺の知人に、こんな奴がいた。

俺が言うのもなんだが、大してモテもしない野郎。

だが奴のナンパ成功率は99%。失敗したケースなど一度しかない。
考えず、ただ直感だけでナンパをする。…奴が失敗したナンパは…
…初めてのナンパ相手、同級生だ」

「同級生…………だと…？」

「馬鹿な！ アンタの話からじゅソイツア顔は良くなくとも良い感じの奴なんだろ！？」

「この阿呆が。初めてのナンパ相手だ。
普段とは違う自分の姿を見せ、失敗した…

つまり、ナンパとは仮の顔でやるのではなく、本当の顔で行うもの！
ま、俺は成功した記憶が無いんだが、な。ちなみにソイツアその同級生と結婚した。

頑張れよ少年たち！ 持ち味をイカせッ」

なんとなーくだが哀愁が漂うガジルの背中。

きっとナンパには良い記憶が無いのだろう。

そんなガジルに対し少年達が無意識に行つた行為は、敬礼であつた。

「ねえシグナム」

「なんだ、アギト」

機動六課の面々が集い、海の家なるところで力キ氷や焼きソバを食している中、可愛らしい水着を着たアギトが、いつもどおり髪を束ね、やや大きめの羽織で肌を隠しているシグナムに話しかける。

「今日のおっさん、なんか変なんだよなあ…。

アタシの我が仮素直に聞いてくれたし、真っ先にナンパしに行きそ
うなのにちゃんと仕事してんし…」

「そういうえば…」

シグナムは海の家の前で腰を下ろし、大人向けの雑誌を黙々と読み
続けるガジルを見る。

「シグナム? なんかあんのか?」

ガジルを眺めるシグナムの隣に、オレンジ色の髪を二つ編みにした少
女、ヴィータが腰を下ろす。

ヴィータもはやてを守る騎士で、シグナムとは長年の付き合いだ。

「いや……ガジルの様子が妙だというか……」

「ガジル？ ああ、あの黒い奴？ 何だよいつもと違うのか？」

「ああ、今日は普通過ぎる」

人前で堂々と口本読むのが普通？ とヴィータはガジルの品性を疑う。

「あ、入ってきた」

読み終えたのか、大人向けの雑誌を腰に挿み、海の家に入ってくるガジル。

行き先は受付、何か食べるのだろう。

「カキ氷と……それから焼きソバを」

注文したのはカキ氷と焼きソバ。

その二つを持つて今シグナムたちが食べているテーブルに。

「よーアギト。 楽しんでるか」

「うん！ ありがとおっさん！」

「そうか……ありがとなシグナム。 アギトの面倒見てくれてよ」

「あ、ああ……」

いつもと違うガジルをシグナムは疑問に思うも箸を進めるシグナム。そんな中置いてけぼりをくらつているヴィータに気づくガジル。

「おつと失礼、お嬢さん。

俺は雇われた探偵、お嬢さんは？」

「……ヴィータ」

「ヴィータちゃんか、お勤め『苦勞様』

短く返事をし、ヴィータはシグナム同様、疑問を抱きながら箸を進める。

「あの――」

「ん？」

四人で不思議な雰囲気を漂わせながら箸を進める中、ガジルは誰かに呼ばれた。

振り向くとそこには水着姿のはやてが立っていた。

「えっと……君は確か……そうだ、機動六課部隊長八神はやてちゃん。だつたか」

「あ、ビーも先ほどは。

それと名前、覚えといてもうれて」

「いやいや、レディーの名前を覚えることなど、朝飯前のオヤスマ

ナサイよ

「ふふふ、面白い人やな。
シグナムが気に入るわけや」

「あ、主はやで！？／／／／」

突然の発言にシグナムは驚き、思わず焼きソバを落としてしまう。勘が鋭い彼女にしては珍しく気がつかない。それを見たガジルは食べかけの焼きソバをそっとシグナムの前へ置き、時計を眺める。

「うちのシグナムがお世話になつてます。
ご迷惑かけてないか？ シグナム？」

「ハツハツハツ、いやー、シグナムには料理とかして貰つてますんでアギトも喜んでくれますし、うちに貰いたいくらいですよ」

「が、がじるつ！…？／／／／／／」

顔から火が噴きそつたほど真っ赤になつたシグナムは何も出来ず、震える指先で箸を握つた。そしてやつと気づいたのか、地面にこぼれた焼そばを発見する。

「あ、俺ちよいと席外すからよ、あんま迷惑かけんなよアギト」

言葉を発しようとしたシグナムだが、もうステにガジルの姿はなく、店を後にしていた。

花束を片手に、ガジルは墓の前に立っていた。
墓といつても、立派なものではなく、ただ石を積み重ねて作られた
子供でも作れる墓。

「…久しぶり。なんとか元気でやつてるよ」

彼にしては珍しく弱々しい声、少し幼げなのは氣のせいではない。
ガジルは微笑みながら花束をそっと墓の前に置く。

「最近賑やかになってきたんだ。
気になる女の子も出来たかな」

墓に向かって発するガジルの横顔はどこか悲しげで、昔を懐かしむ
ような顔をしている。

それから目を伏せ、合掌。静かな森の中、そこから海が覗けること
から、崖に近い場所であることがわかる。

瞼の裏に映る風景。此処から眺める景色も年々変化していく。

「俺もそろそろ、変わらにやならんのかねえ…」

それに応えるように、一陣の風がガジルの頬を撫で、線香の煙を流
す。

見上げた空には一筋の飛行機雲が空を切るように走っていた。

「おつわーんー。」

浜辺に戻ると、アギトが元気良く腕を振りながらガジルの下へ走ってきた。

その手には捕まってきたのかヤドカリが一匹。

「ほう、捕まえたのか？」

「うんー。シグナムに泳ぎも教えてもらつたんだー。」

「よオかつたじやねーの。

そのヤドカリは返してやりな、夜に仕事あつからまだオネムしてー
ようだぜ」

ヤドカリは照りつける日から身を守るようにして殻に籠つている。
アギトはもつたいたなをつに口を尖らせヤドカリを砂浜に放す。

「良い子だ」

「へへへ、じゃあシグナムの所戻るねー。」

「おつわー

「あ、忘れてた。おつわー、シグナムが眞偽でも悪いのかつて言つてた」

「具合? こつもむだおり良好だが?」

「えへ、でもやつぱり今日のおつむん変だな」

それじゃ、と手を振り浜辺を走つてゆくアギト。
ガジルはそれを見守ると、今日一日、自分がとつた行動を思い浮かべる。

「…心が出てたか…よし、騒ぐか」

自分の類を二度呑き、サングラスを外し、深呼吸。
走つてゆくアギトを追い越すもよつ、軽く走り、アギトの後を追つ。

「あれ? どうしたんだおつむん?」

「ふつ、折角海に来たんだ、久しふつに女の子に話しかけるのも良しかな、と」

「…おつむん、自分の仕事分かつてる?」

「理解しているとも、機動六課の女性方をナンパ戦士から守る事だ
るつ?」

しかしながら、誰も俺がナンパしてはいけないとも言つてこない

「屁理屈じやん…」

「屁理屈ウ? ハツハツハツ! 勉ン一強が足りんようだなアアアギト
オ!」

ナンパ戦士から六課女性陣を守る! つまりだア、俺と言つ存在そのものがナンパと言つモノに変わり彼女達を守り抜く! 毒をもつて毒

を制す！ナンパをもつてナンパを制す！男が男である限りイ・ナンパと言う不变の法則から抜け出す事は出来んのだア！それが例え神であつたとしてもーッ！」

砂浜の真ん中で10歳そこらの少女に何かを熱く語つてゐる黒い男はまさに変人といつても良いだろう。

アギトは溜め息を吐きながら10mほど離れた距離からジトツとした目でガジルを眺めるシグナムの下へ行く。

「シグナム、おっせん逮捕されるだろ？」

「間違いないな」

「ナンパツ！成功ツ！データツ！つまり結論ツ！夏男の世界が発生しそこに…あれ？」

やつと自分が何をしているのかを理解したガジルは咳払いを一つし、何事も無かつたかのように一人の所へと足を進める。

「…ナンパしても良い？」

「「仕事しろ」」

それから数時間、ガジルは仕事をしながらも一人の相手をした。

辺りは茜色に染まり、青く輝いていた海はまるで燃えているかのように赤く染まっていた。

海へ訪れていた客はほとんど帰ってしまい、人気が無いに等しい。

ガジルは一度目を伏せ、赤く染まつた海を睨みつける。

「……」

ガジルの脳裏を横切るのは、家を包む灼熱の炎。降り注ぐ血液。踊り狂う断末魔。

幼かつたガジルには、あまりにも過酷過ぎた運命。

「ガジル？」

「…シグナムか」

凛とした声に振り向くと、そこには瞬間と姿が変わらないシグナムが立っていた。

その表情から、少々遊び過ぎたという思いが伝わってくる。

「どうした？ そんなに殺氣立つて」

「いつもの通り、クールでナイスガイな俺のはずだが」

「…嘘がヘタだな」

「嘘には定評があつたようななかつたような

「何かあつたのか？」

ガジルの頬が一瞬強張る。

心配そうなシグナムの顔、罪悪感を覚えながら上手く誤魔化そうと言葉を発するガジル。

「…やアな、お前が水着見せてくれれば思い出すかも?」

ガジルの目が大きく見開かれ、その視線は目の前にいるシグナムへと全て注がれる。

解かれた後ろで束ねられた髪は潮風に揺れ、肌を隠していた上着はハラリと地面に落ちる。

「…早く言え……／／／」

豊満な胸を隠す黒のビキニ、スラリとし引き締まつたボディーライン。

人生至上初の出来事にガジルは呆気に取られていた。

「あ、あまり見るな……／／／」

頬が赤く見えるのは夕焼けの影響だけではないだろう。やつと正気を取り戻したガジルは一度唾を飲み込み、シグナムから視線を逸らす。

「え、あ、あーと…そのアレだよー…アレ」

このような急速な事態に滅法弱いガジル。

あの天下の大通りで工口本を堂々と読んでいる姿は一体何処へ消えうせたのだろう。

「じ、実家に帰つたんだよ」

「は？…どうことだ？」

「い、いいいいいや、…」うちの話…ハ、ハハ…（ヘタレ過ぎるだろ俺イ！なんだよ！）これじゃあ残念を認めざるを得ないじゃねーか！」

状況が状況で無ければこの場を去つていたが、アギトと遊んでいたときも肌を晒さなかつたシグナムが少しでもガジルの心の支えにならうと恥ずかしいのを我慢して肌を晒していると思うと逃げ出せない。

「ええい…ウジウジするな早く言え…」

業を煮やしたシグナムは裏返るような声でガジルに喝を入れる。

「じ、実は…」

「実は？」

「今日で、魔法使いにクラスチェンジしました…」

海に静寂が訪れる。

シグナムはもちろん、海も風も太陽も呆れたのか何も言わずにただ静寂が流れ去るのを待つ。

静寂を切り裂いたのは赤くなつたガジル。

「だ、だつてよー！俺今日で30歳を迎えるクセに、一回もー、一回も女のもと【ヒューッ】もした事ねえし、キツスもした事ねえんだぞ！顔は結構いかしてる方だと呟つのに、何だというのだこなクソオオオーーーツ！」

一人涙目で夕田へ訴えかけるガジルに呆氣を取られながら、そつと微笑むシグナム。

「チイイイイクショオオオオオオオオオオオオー！」

「ガジル、そこで止めておけ。

虚しくなつてくるぞ……」

「分かつてる！分かつてますとも！だけどこの胸の中のモヤモヤしたモンが一向に、一向に晴れねエー！まな板についたシツコイ油汚れみたいな感じのツー！」

「なら、また買えばいいだろ」

シグナムの何気ない一言にガジルは叫びを止め、シグナムを見る。

「……それも、そうか……そうだよな！魔法使いになつても【ヒューッ】出来ないとは限らねえもんな！
よオし！今年中に彼女探すぞオオオオオオー！」

また夕田に向かい叫び声を上げているガジルを見たシグナムは、ガジルに背を向け皆が待つてているだろうバスへと足を進める。

「あ、シグナム」

「なんだ？」

「その……水、着…似合つてたぞ」

「あ……ありがとう……／／／」

顔が熱くなつてきたのが分かつたシグナムは、ガジルに見られない
ように笑みを浮かべながら走り去つていつた。それを見送つたガジルは、空を仰ぐ。

「少し、変わつてみるか……」

ガジルの咳きは、再び吹き始めた潮風に飲み込まれていつた。

依頼N。・X パーティーには一人魔法使いを（後書き）

シグナム「」

はやて「やけにこ機嫌やな」シグナム

シグナム「はい。今日は特別」

はやて「水着新調したかいがあつたな」

シグナム「はい！……へ？あ、主はやて？／／／

はやて「フフフ…主たるもの、従者の行動は把握せなな…」

依頼NO.4 愛の魔法使い（前書き）

更新遅れてしまい申し訳ありません！

少し全身打ちつけたり骨折したりで入院していました（おい

さて、今回はかなり探偵からかけ離れた内容となっています。

そのため一話に凝縮…出来ますかね…

それでは、どうぞ！

依頼NO.・4 愛の魔法使い

「おっせんーおっせんー！」

「クツーなんだアアギトー！」

「早くしろよー！来たぞー！」

「ここのままでは…クツー俺に構わず先に行けエエエー…」

ガジルの慟哭にも似た叫びと共にWこと書かれたドアの奥から卑猥かつ下品な音が聞こえてくる。

アギトはその音をかなーり不快に思いながらもドアをノックする。

「早くしろよおっせんーお密さん帰っちゃうだろー！」

「つ…半ケツ+汚物が付着した状態でこの俺にお客の接客をしようと囁つか…そんなこと地獄の閻魔様でもせんわ…この鬼娘エ…」

「察しのとおり、この残念、下痢である。

それも客が来たというタイミングで胃袋に設置された爆弾が爆発した。

アギトにはまだ接客は早いと思いながらも、涙目で体をくの字に曲げているガジル。

「あの…大丈夫ですか？」

そんな一人に、聞き覚えのある女性の声が響く。

「え？ もしかしてお客さん？ それも女性？
なんてこつた！ 後十数秒待つてください！ お願いします！」

ガジルの言葉から覚悟にも似たものを感じたアギトは客を客間へと連れて行く。

客を座らせ、いつもガジルがしていることをしようとしているアギトの耳に強烈に卑猥な音とガジルの慟哭が響く。

「あの… 大丈夫なの？」

「……すみません」

気まずい沈黙が流れる。

何秒か経つた後、WCのドアが開かれ、その奥からケツを押さえながら客間へ歩いてくるガジル。

目が虚ろであつた。よほど壮絶なデュエルが行われていたのだろう。

「おっさん大丈夫？」

「いや… その… 下品なんですけど、ね… フルパワーで押し出した瞬間、毛も巻き込まれちゃつてね… その、ナンカね、開始早々これはないよな…」

若干目が赤くなっているのは氣のせいにしておひつ。
ガジルはアギトに礼を言い、客の顔を見る。

「…あれ？」

来客用のソファーに座っている栗色のサイドテーブルの女性にガジルは見覚えがあつた。

ガジルが対ナンパ用戦士として雇われたときに出会った女性。

「おや、確か……ヒースオブエース、高町なのはさん、だつたか」

「名前覚えててくれたんですか？」

「ふつ、俺は」——記憶力は達者なんですね」

ガジルは誇らしげに言つてゐるようだが、傍から見ているアギトから見ればかなり格好が悪い。

そんな一人の表情に苦笑いをするのは。

「で、そのヒースオブエースさんがどーして此処に？
ま、私服で着てるって事は、俺に告白が依頼の一いつだと思つが」

「後者です」

「それは残念だ」

当たり前のよう答えたなのはの前にアギトが淹れたての珈琲を置く。

「そんで、内容は

「実は……」

「ふむ、良い味だな」

ガジルは完璧に季節外れの黒いコートを羽織り、田の前に置かれたケーキの味を堪能する。

今ガジルが居るのは翠屋という喫茶店。一昔前、此処がどこかの雑誌に載つていたことを思い出したガジルは店内を見渡す。

「眺めも最高ときたか」

店内の大半を占めるのは女性の方々。野郎も彼女と来店している者がほとんどである。

「どう思つよ、青年」

ガジルは自分の隣に座る男に言つ。長い髪を後ろで軽く束ね、少女のような顔つきを持った男ノに語りかける。

「はあ… そう言われましても」

ユーノはガジルの質問に答える気が出ない。

原因是ユーノの目と鼻の先、カウンターに座る一人をジトつとした目で見つめるなのはがいたからだ。

今回、ガジルの元にやつてきた依頼は、ユーノをなのはの父に認めさせることだ。

ズバツ、と言つと、結婚を認めさせて欲しいという内容だ。

内容からコーコーとなのはが交際をしていくことが分かる。

人の恋路にあまり興味の無いガジルはコーコーとなのはの反応に微笑を浮かべる。

「しかし、生憎と俺は魔法使いだ。

色恋沙汰に縁も何も無い男だぞ？ あまり良いサポートは出来んと思うが…」

「「魔法使い？」」

「あ、いや…忘れてくれ…」

ガジルは疑問に思っていた。
何故自分なのかと？

いや確かにこれも全うな依頼だろう。

しかし色恋沙汰、しかも結婚が関わっている重要な男女の関係に残念極まりない魔法使いが何を出来る？

むしろ俺をサポートしてくれ。

と田で先ほどまで訴えていたが、今になつてやつと理由が分かつた。

「なんだ… また来たのか」

「お義兄さん…」

店の奥からやつてきたのは高町なのはの実の兄、高町恭也。
彼の立ち振る舞いを見たガジルは目を細める。

「中々イイ味だ…

今度はこのアルプスブラツクパフェを注文する」

「通ですね」

「いや、こーゆー店に入るのは10年ぶりだ」

懐かしむ顔を浮かべるガジルを背に恭也は店の奥へと入っていった。そのやり取りを横で見ていたユーノは大きな溜め息をつき、ガジルに語りかける。

「…僕、恭也さんに嫌われてるんですね…」

「ソナ」とだらーと思つたぞ青年。

11

ガジルの言葉に押し黙る一人。

「そう緊張しなさんな。

昔の俺ならギーしてたかは分からんが、今は深く追わん。
しかし、あア殺氣立て歩かれたら密も困るだろうに

店内をもう一度見渡す。

先ほど見渡したときは賑わっていた店内も、恭也の出現により先ほど比べどこかヒツソリとしている。

ガジルはヤレヤレと首を振り、なのはに語りかける。

「で、何で俺に依頼したんだ？」

恋愛沙汰なら俺より中学生の方が詳しいだろ?」

なのははガジルを見つめ、視線をユーノに移す。
ユーノもなのはと田を合わせる。

「実は、私の家、少し特殊なんです」

「特殊?」

れつきの兄ちゃんみたく、全員武術を習得してるとか?」

「はい。特にお父さんとお兄ちゃんが使い手で…」

なのはは辛そうに田を伏せる。

そんなんのはをユーノは心配そうに見つめ、
意を決めたかのように田を見開く。

「ガジルさん!」

「何だ青年」

「僕を鍛えてください!」

「何があつた…」

事務所の客間の入り口に立つたシグナムは田の前の光景に絶句していた。

妙にムワツとした空氣、鼻を突く汗の香り。

「せ、先生！もう限界です！」

「限界なら死んでいる。後100回」

「は、はいイイイイ！」

シグナムの目に映つているのは、客までダンベルを持ち上げているユーノと、それに呆れた目を向けているアギト、ソファーで大人向けの雑誌を読んでいるガジル。

「……ガジル」

「なんだね？」

「何だコレは」

「ああ？」

事の発端であろうガジルに詰め寄つたが、彼は大人向けの雑誌に集中しているのか適当に答える。

拳骨を一つ入れた後、この事務所の唯一の癒しであるアギトへ向かう。

「アギト」

「シグナム…」

「…何があつたんだ」

「良く分かんない。

お客が来て、おっさんが出て行つて、帰つてきたと思つたらあのメガネとダンベルを持つたおっさんがやつてきて……」

アギトにも分からないらしい。

依頼をされたということは、何かしら理由があるのだろう。そう解釈したシグナムは大人向けの雑誌を読んでいるガジルの手からそれを奪う。

「どーしたシグナム。

人んちの家宝奪うとは、逮捕ものだぞ」

「……『ノーノのビージが家宝だ』

シグナムは手に持つた大人向けの雑誌に目を向け言つ。

表紙を見たシグナムはやや頬を染める。

「定価3980円。

コイツはネットで買つたものではなく、自らの足で歩き、手に入れた代物だ。

豪華付録アーノンド袋どじ、袋どじこは夢とロマンが120%詰まつていてる。

付録のDVDも素晴らしい出来だ。ちなみに俺は袋どじを開けない派だ。見えるか見えないか、チラリズムが俺を襲う。コンビニとか電車とかで必死に袋どじを開かないように中を拵もつとしている者。見たいのなら買え、そう思うもつて応援してしまつ。お前はどうだ

？」

「女の私に聞くな……燃やすぞ」

「普通にカンベンしてくだせ。で、どうしたよ」

「アレはまじうつう」とだ」

シグナムは必死にダンベルを上げているユーノを指差す。

「依頼だ」

「……どういふ依頼だ」

「アイツを鍛えろ、以上。
どうもモヤシっ子らしいんでな。
まずは屈強な肉体を作つて貰わねば」

明らかに体が作られる前に壊れそうな鍛え方。
やらせる方もやらせる方だが、それをやる方もやる方だ。

「おこコラ青年。
今合計何回だ？」

「あ、328回ですウウー」

「正確には329回だ。」

喜べ青年、女神様が来たことにより今からお前に休憩の時間を与え
る。

風呂は沸かしてあるな、アギト」

「うん」

「よし、今から3時間、体を休めり」

「は、はい…」

ユーノは力が抜けたのか、ゆっくりとダンベルを下ろし、コラコラと揺れながら風呂場へ向かう。
心配になつたのか、アギトがその後に付いていく。

それを見送つたシグナムはダンベルに目を移し、ダンベルを持ち上げようと力を入れる。

「む?」

持ち上がらない。

大きさはさほどものではない。

しかし市販をされている物とは比べ物にならないほどの重量。

「何kあるんだ」

「軽く30」

ガジルは立ち上がり、シグナムの隣に立つ。

そのままシグナムの左手に握られていた家宝と買い物袋を取り、台所へ向かう。

「う…一やつと持ち上がつた…」

「なアーにしてんだ、ほら早く下準備」

「あ、ああ」

此処へ来た本来の目的を思い出したシグナムは、ダンベルを下ろし台所へと足を進める。

食材を袋から出し、テーブルに置いたガジルはシグナムとすれ違うように台所を出、ダンベルへと足を進める。

そのまま床に転がっているダンベルをつま先で蹴り上げ、それをキヤツチする。

「ふむ、重さを増やした方が良いか…」

本来ならジッククリと鍛え上げたいところだが、時間が無い。ユーノを鍛える期間は僅か三日。

「ククク、まさに付け焼刃だな」

何故三日か、それは三日後が決闘の日であるからだ。

「義兄と結婚を賭け決闘か…」

そう、対戦相手はなのはの兄、高町恭也。

相手は武術を習得しているかなりのやり手、勝てば結婚負ければ別れる。

それが決闘の内容。

ガジルは頭をダンベルで掻き、部屋の奥へと足を進めた。

依頼NO.4 愛の魔法使い（後書き）

残念「…アレ？俺、探偵じゃなくね？」

アギト「今頃気づいた…」

依頼NO.4 花にはモヤシ、鼻には炭酸飲料（前書き）

更新が遅れました！

折れた腕も順調に回復するなか、この季節の移り変わりの激しさと
きたらもつ：

失われていた意欲も漸く回復し、依頼NO.4 解決です。
しかし、考えてみたら残念さん探偵じゃなくネ？……まあ、この回
は伏線、ということです…

それでは、馴文ですがどうぞ！

依頼NO.4 花にはモヤシ、鼻には炭酸飲料

「お兄ちやん……」

高町家の道場で座禅を組んでいる恭也になのはが話しかける。

「何だ」

「無茶だよ……」んな事

「腕の立つ男を雇つたんじゃないのか」

「でも……」

「何も出来なければ、所詮それだけの男だったといつ事だ」

「……」

なのはは一人座禅を組む恭也を背に道場を去つた。

決闘まで後数時間、今頃全力で稽古に取り組むユーノの事だけが心配だった。

「おー、起きる青年」

「うう～ん……もつ食べれないよ」

「生意氣な、後三秒で起きなかつたら起しちゃからな

客間のソファーで大きな鼾をかきながらだらしなく眠つてゐるゴーノの傍に立つガジル。

先ほどの一言から時計の針が三回動いた途端に、ガジルは台所へ向かい朝飯の準備をする。

「おっさん……起しちゃなくていいのかよ……」

ゴーノのやけに大人クサイ鼾から台所へ非難してアギトは、台所に現れたガジルに言う。

そう、後数時間で決闘が始まる。

「良いんだよ。動いた後は休む。どんな状況だろ？ がコレを忘れたらダメだぞ」

「間に合わなかつたら元も子もないじゃん

「確かにそうだ。しかし奴は決闘があるにも関わらず田覚ましをセツトしていない。

つまりビーガー」とか分かるか？

「……田覚ましセツトするの忘れた」

「いいや違うね。青年はまだギリギリまで寝ていいんだ

「うめん、それおっさんだけだと想つ

「良くあるだろ？　学校とか行くとき、ちょっと早く起きたから一度寝していい」という思考。その後は時間との勝負だ。勝てばセーフ、負ければお仕置き。それも勝負は紙一重で決まる。どうだ？　ゾクゾク心の底から闘争心が溢れて…」

ブツブツと咳きながら朝食を作るガジルを見ながら、やつぱり変な奴だと再認識するアギトであった。

流石にこのままではダメだと思ったアギトは、朝食を作っているガジルの代わりにユーノを起にしあつとソファードに近づく。

「おーい、起きる」

「…あ、やー、セーヒはダメだよ…！　嫌じゃないけど」

「聞こいていて腹が立つな。アギト、鼻を摘まめ」

こーゆー寝言にはやけに敏感なガジルは不快感を覚えたのか、アギトに起こし方を教える。

珍しくガジルと同じ事を思つていたアギトは、戸惑う事無くユーノの鼻を思いつきり摘まむ。

「ツ！　い、痛い！」

「お前の寝言で俺の胸が痛くなつた。ほら、せつないと食え」

「あ、はい…」

ガジルはやはり不機嫌なままユーノの前に朝食を置く。

まだ覚醒していない頭でガジルの作った朝食を食べる。

「あの……先生」

「何だね青年」

朝食を食べているユーノが唐突にガジルに質問する。

「僕、勝てますかね？」

「分からん」

ピシャリと答えるガジル。

余りにも無責任な答えであつたが、ユーノは表情は静かだった。

「俺はその兄貴の実力を知らないんだ。まあ立ち振る舞いからしてかなりのものだとは考えられるが」

「はい。とても強いです。多分、先生より」

「マジで？ まあ何にせよ、最初から諦めムード解放させてりや勝てるもんも勝てんよ。というか、聞くのが随分遅くなつちましたが、三日後に決闘だなんて鬼畜じゃね？」

「…何でも、店が休みの日に早く終わらせよ、だそうです」

「なるべそ、わざわざ相手の都合に合わせる必要はないといつ」とか…良い心がけだな」

「」馳走様でした、と手を合わせたユーノは立ち上がり事務所を出る

仕度をする。

ガジルは黙つて空になつた皿を台所まで運ぶ。

「あ、そうだ青年

「はい」

「勝負に勝つ者は強い者じゃない。勝負に負けるのが弱い者じゃない。勝負に勝つた奴が強いんだ。勝負に負けた奴が弱いんだ。だから、お前と兄貴はまだ対等なんだよ。自信持つて頑張りな」

「……」

「まつ、まずは兄貴に勝つ前に時間に勝たなきやな

「へ?」

ユーノは客間に備え付けられている時計に視線を移す。

時刻は決闘開始前の二十五分前。此処から翠屋まで走つて二十分。

現状を理解したユーノは青ざめた顔で事務所を飛び出していった。

事務所を一目散に駆けていくユーノを台所の窓から眺めているガジルは微笑を浮かべる。

「頑張れよ青年、三日見てきたが、俺のシゴキに耐えた青年の根性は中々のモンだ」

「おっさんは行かないの?」

「ん？ 馬鹿を言つたな。今日は依頼が来なければ、友人から借りてきた仮面〇イダーク〇ガを今日一日で全話鑑賞するという任務がだな」

「人でなし」

「半分ジョークだ。今日は少し調べモンだ。家を空けるから、留守番は頼んだぞ。後でシグナムが来るらしいから面倒見てもらえ」

そう言つと、ガジルはお気に入りの大人向けの雑誌を取り、事務所を出た。

「お、遅れました！」

ユーノは息を切らしながら高町家の道場へ上がる。道場には心配そうにユーノを見つめるなはと、無言のまま、ユーノに背を向け正座を組んでいる恭也。

ユーノは違和感を覚えながら一礼をして恭也の後ろに立つ。決闘開始まで、後一分。

「おはよウジヤリコマズ」

「おはよウ。…決闘の内容は覚えているな？」

「はい。どちらかが気を失うまで勝負を続行する」

「もうだ。……もう時刻だ」

恭也がそう言つと、なのはの傍らに置いてあつた目覚ましが道場に響く。

向きをユーノへ変えようとした恭也の頭部に、衝撃と鈍痛が走つた。

「つー！」

何事かと衝撃を、その細い腕で与えたユーノを睨みつける。その細い腕は振るえ。殴った拳が赤くなっている。

「決闘は、もう始まっています！」

思い切り張つた声が震えた。

それだけ思い切つた行動だつたのだろう。

ガジルがまともに教えてくれた先制攻撃。決闘時間になつた瞬間相手を殴りつける。悪く言えば不意打ちだ。

この手のやり方にはユーノは否定的であつたが、この勝負だけはどうしても勝たなければならぬ。

「やつてくれる……！」

「コレです」

「サンキュー」

とある大型ネット喫茶。

そこのある部屋に一人の男が同席していた。

一人は部屋中に残念オーラを撒き散らしている男、ガジル・アルタレッタ。

一人は先ほどまで妹と戯れていた男、ティーダ・ランスター。

「しかし、珍しいですね先輩が自分から僕に近づくなんて」

「んー、ちょっと気になることがあってな」

「管理局のデータを使って調べるものですか？」

「いやなに、こっちの方が手っ取り早いだけさ」

ガジルはティーダから受け取ったデータをネット喫茶に送り、手馴れた動きでデータをチェックする。

その顔からは先ほどまで机の上に置かれた大人向けの雑誌を読みふけていた色は消えうせていた。

ティーダがガジルに渡した物には、管理局の履歴のようなものが詰まっている。

勿論、管理局の人間がこのデータを持ち出すことは禁止されている。

「…………」

作業を進めていたガジルは、ある一件の事件を見て急に動きを止めた。

ティーダは横からその事件の内容を見る。

「殺人集団による殺人事件……コレって確か……」

「…………ああ、俺が炭酸飲料飲めなかつた時代で起きた事件だな」

ガジルは一泊置き、その事件の内容を詳しく調べ始める。

隣で作業を見ているティーダに、ガジルから何かが伝わってくる。必死に抑えているが、漏れ出す殺氣と怒氣。声を掛けようにも、どう掛ければ良いかが分からぬ。

「…………管理局は、コイツ等をまだ追つているのか？」

「……は、はい。一応僕も担当しております」

「ククク……違法デバイスと殺人集団とは……随分と偉くなつたじゃねーか、ええ？ ティーダよ」

ガジルは不気味な笑みを浮かべ、事前に用意しておいたメモ用紙に何かを書き込んでいく。

その中身を覗こうとするが、案の定ガジルに止められてしまつた。

「あの、先輩。一応、確認だけでも……」

「何だ、見てはいけないものでも入つっていたか」

「…………」

「安心しろ。不審なものは新作のエロゲのデータしか見当たらなかつたぞ、このシステム」

「ツー？ だ、誰ですか四時間並んで買った新作のエロゲのデータを保存する不屈き者は！ ！」

「落ち着いて鏡//口」

隣で違う違う、と喰いているティーダを他所に、ガジルは支度を始める。

「あ、とこひでティーダ」

「僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない」

「男の性だ、諦める。

…もし、もしだぞ？ 僕がティアナちゃんを嫁にすると言つたら」

「ぶん殴ります」

「ほう……」

滅多に見ない自分に対する強気な態度に声を漏らすガジル。付き合いは長いが、これほどまでに自分に強気な態度を見せたのは、勝手にメロンパンを食つたとき依頼だ。部屋の中にピリピリとした空気が流れる。

「フツ、安心しゅ。どうせ俺なんかがプロポーズしたところで、誰も貰つてくれやしない」

ガジルのいつも通りの軽口、ティーダは冗談だと氣づき皿線を反らす。どこかほつとしたような色を見せる顔色。良く見ると冷や汗までかいている。

「で、ですよねー！ 昼間から大通りで十八禁な本を読んでる先輩なんか誰も貰つてなんか」

「馬鹿か。そうか馬鹿なんだなテメエは。前々から思つてたことだが、馬鹿だなテメエ。このイケメンで超が付くほど話題なガジル様が誰にも貰われない？ はつ、我ながらジョークが過ぎたぜ。で、なんだ？ その、明らかジョークやん！ つてツツコミが来るものをテメエはマジレスしやがつて…」

「あ、はい……すみませんでした」

ティーダは、本当に残念な男だなあ、と心の中で呟きながらデータを受け取り、立ち上がる。

長居は無用。早くデータを返さなければ勝手に外へ持ち出したことがバレてしまつ。

「先輩…僕、そろそろ戻らないとマズイんで…」

「おつ、すまんな。助かったぞティーダ」

「あのー…真面目な質問なんですけど

「なんだ？」

「管理局を遠ざけている先輩がどうして、管理局の「データなんかを…」

最もな質問である。

先程は巧く話を逸らしたガジルだが、ティーダの立場と、その恩義に応えるべく、口を開いた。

「約束さ。ただの、男と男のな」

ガジルは二ヒルな笑みを浮かべながら部屋を出て行く。
その顔にはどこか悲しみを押し殺したかのような決意が籠つっていた。

「うわああ！」

ユーノは倒された体を無理やり横にズラす。

刹那、先程までユーノが転がっていた床には、凄まじい勢いで叩きつけられた恭也の足があった。

咄嗟に体をズラしていなければどうなつていただろうか？
考えるだけでもゾッとする。間違いなく氣を失つて戦闘不能。

地面に倒れていることに加え、先程から何度も恭也の打を受けている。

以前の自分ならもつとっくに意識を手放しているところだつただろう。

(どうする…)

だが、結局は受けているだけ。

ユーノが加えた打はある不意打ち一本。

ガジルには、頭を使えと言われているが、何も思いつかない。

戦闘に馴れていないのか、視野はいつもより狭く、心に余裕が無い。まるで追い詰められたドラ○もんが道具を探すかの如く作戦を練るユーノ。

ヒンヤリと冷たい床が熱くなつた頭を冷やしてくれると同時に、今にも止めを刺してきそうな恭也が纏う威圧感をよりいっそう際立たせる。

(ポジティブだ…何事もポジティブに取り組むんだ…)

「お邪魔しまーす」

『…?』

限界まで引き伸ばされた緊張感が支配していた道場に、気の抜けた声が響く。

恭也はユーノに集中していたのか、道場に入ってきたガジルの存在に気づくのが遅れ、視線を一瞬ガジルに移す。

「しまつ」

その一瞬のスキを見逃すか、とコーカーは迫り来る恭也の足を払いのけ勢い良く立ち上がり、その勢いを殺さないまま恭也の顎に頭突きを入れる。

道場に鈍い音が響く。

それと同時に道場を再び支配する緊張感と静寂。

「…シスコンにしちゃ、愛する妹が何処のどいつかも知れねー野郎に奪われるのは納得いかんわな」

ガジルは田を見開くのはに軽くウインクして、手にぶら下げていた機械の部品が多く入った袋を道場の床に下ろす。

「モヤシはモヤシで固い所もある。特に頭…あれ、種だっけ?
……ま、一言、言つてやるとしたらい。 残念だつたな」

ガジルが道場の入り口の扉をピシャリと閉じた瞬間、仰け反つていた恭也の体がゆっくりと崩れた。

「コーカーくん……コーカーくん!」

何とか立つてゐるが、今にも燃えぬきやうになつてゐるコーカーに、耐え切れなくなつたなのが抱きつく。

なのはを支える事が出来ずに呆氣なく押し倒されるコーカー。

そんな一人を羨ましそうに見つめるガジルは、道場に仰向けて倒れている恭也に近づく。

「いやあー…、羨ましいなあ、妬ましいなあ。
彼女居ない暦=年齢の俺には、この光景はこう見えるなあ…いやマジ
で。

そうは思わないか？ お兄さんよ」

「……全部、アンタの戦略どおりってことか」

ガジルの何気ない言葉に、気を失つているはずの恭也が応える。
その顔は負けたにも関わらず、どこか清々しい。

「はて、何のことやら」

「フツ、あの不意打ち、教えたのはアンタだろ？」

「効いたか？」

「まだまだだ…だが、奴には効果があつた。不意打ちで緊張を覚えさせ、無駄に根性だけ鍛え上げ、長期戦に持ち込んだ。後は俺が奴に集中し、奴の頭が混乱しているときにアンタが気配を消して現れる。当然、奴に集中していた俺はアンタの存在に気づくのが遅れ、何者かと視線を移した…。俺しか見えて、感じていない奴にどうては絶好のチャンス。…そして弱点の顎に思い切り頭突き…コレを戦略と呼ばないでなんて言つんだ？」

「偶然。てかアンタ、結構余裕そうだな？」

「当たり、前だ…」

まだ揺れる頭を押さえながら上半身だけを起こし、道場でイチャつ
く一人を眺める。

「まあ、アンタの戦略つてのがそりだとしたら、一つだけ誤りがあるぜ」

「……なんだ？」

「根性は無駄に鍛え続けなきゃいけない」とだつてことられ

「…ガジル、どういう事だ」

「何がだ？」

客間で筋トレするモヤシがいなくなつてから一日が過ぎた。
少し前までは汗臭かつた客間も、ファ〇リーズの力により元の香り
を取り戻し、汗臭の根源も事務所から消えた。

そんな事務所に、苛立ちを覚えながら、ソファーに踏ん反り大人向
けの雑誌を読みふけているガジルの前に仁王立ちするシグナム。

見るからに不機嫌。雑誌を読んでいるガジルも、やや不機嫌な様子。

「私の出番が、ない！」

「今のお前はどう説明する。イケメンな男と会話しているというシ
ュチュエーションを貰つておきながら出番が無いとは…つぐづぐだ

な

「だ・ま・れ」

シグナムは青筋を浮かべ、テーブルに置いてあつた口○口一ラを、同じく何故か置いてあつたスポットで吸い、タップリ蓄えたスポットの先端をガジルの鼻の奥に容赦なく入れ、溜まつた炭酸飲料を鼻の奥で解放する。

「いだつ！ いだだ！ ば！ 止めつ、止めろ…」ほつ！ 止めてくだざッガ！」

涙目で抵抗するガジルに何故かキュンを来たシグナムは、満足に領きスポットを抜き取る。

まさに虫の息、涙目でもせ返つてているガジル。

「で、でめー… 一体なんの恨みがあるつてんだ！」

「私の出番が無かつたと言つているんだ！」

「こんなことして良くも抜け抜けとオ…！ 僕だつてなア！ この回すつとインストラクターだつたんだぞ！ もつとこう…ハードボイルドな探偵をしたかったのに… お前に分かるかこの虚しセGA！」

「知るか！ 何で私を誘わなかつたんだ！」

「これは俺の仕事！ 何故お料理しに来てるおっぱい魔人を仕事に付き合わさなきゃならんのだ！」

「あ……す、すまん……」

「きゅ、急に謝まんなよ……俺も悪かつたって……お互い様だ、お互
い様……」

あ、ほんと鼻に炭酸飲料は本気で止めて」

いつもの通りだな、と反対側のソファーで頷くアギト。
その視線は一人からテーブルへと移る。

テーブルの上にはバラバラに分解された謎の機械と、丁寧に並べら
れた部品。

その傍らには難しそうな分厚い本。因みに、これが今回の依頼の報
酬で、何でも機械の書物らしい。

何かを作っているのかと聞くと、物が透けて見えるって素晴らしい
よなア、という危険極まりない答えが帰つて来る始末。

決闘に勝つたユーノは無事結婚を認められ、来月には式を挙げる予
定らしい。

「…それに比べてこの二人は

アギトは、どう転んだか先程よりデットヒートしている一人を見て
溜め息をついた。

依頼N.O.・5 ガーラちゃん（前書き）

いつもドナドナです！

腕も治りかけてテンションとモチベーションが上昇中の筆が…更新できていない。orz

しかも今回はviviより新キャラ、ジークリンgteさんを入れたり等…

書いている最中で、アレ？こんな感じで良いのか？等と深く考え込んでしまったり…漫画で楽しんでいる僕には資料が少なすぎたりとかで…

特に依頼N.O.・5は、今回は戦闘描写無なのですが、後半ドッロドロの戦闘になりそうですが、

書いている最中何度も力不足を感じましたが、どう

早朝。人気が元々少ない事務所前の道は、いつも以上に人気が無く、道を行くものは一人一人。

新聞配達のバイトが何かか、こんな早朝からご苦労なものだ。

そんな事務所前に、フードを深く被つた少女が、事務所を眺めるよう佇んでいた。

フードと、長い髪により隠された瞳には、決意にも似た輝きがあり、そのふつくらとした唇は寒さのせいか、少し乾いている。

「よし……よし」

少女は自分に言い聞かせるように何度も言葉を発し、覚悟を決めたか事務所へと続く階段を登り始めた。

足取りはぎこちなく、やけに緊張している。

階段を登り切った少女は、震える指で玄関へと続くドアに設けられた呼び鈴を押す。

呼び鈴にしては、少々間の抜けの音がドア越しに響く。

「あいあい、今出まーす」

呼び鈴が響いてから十数秒後、やつと事務所の主の声が少女の耳に入ってきた。

少女はもう一度フードを深く被り、ドアの鍵が解かれるのを待つ。少し古びたドアが開け放たれ、事務所の中から、凛としたたたずまいの男が現れた。

たたずまいだけではなく、その瞳も静かで力強い。服装もしつかりとしており、しつかりとした性格の持ち主だと少女は思った。

それが少女の第一印象。そう、第一印象である。

「何か、御用ですか？」

微笑みながら、甘い言葉を発する男。その優しい顔と、甘い声に少女の顔が少し朱に染まる。幸いフードで隠れていながら、少女はどう反応していいかが分からぬ。何度も心の中で練習した言葉が口から発せない。

「緊張しないで、ほら、いらっしゃい」

「あ、あの…」

震えた声が響く。男は微笑み、言葉を待つ。その顔は慈愛に満ち溢れており、少女は自分の心臓の鼓動が徐々に早くなっていることに気づく。

「…お客様か？」

凛とした声が少女の耳に入ってきた。今度は男のものではなく、女の声。気づき振り返ると、そこにはピンク色の長い髪を後ろで結んだ女性が立っていた。

突然の出来事に、少女はあたふたと男の顔を見る。その顔は先程までの凛々しい顔立ちではなく、どこかバツの悪そうな顔をし、親の仇を見るような目で女性、シグナムを睨みつける。

「お前…おい、空氣読めよ」

先程とはまるで別人のような声が響く。

「？ 何がだ？」

「いやだからセア…な？ この状況見て分からんか？ 僕、女の子と話してんんだぜ。この俺が、かなり可愛い女の子と、それをお前…鬼か」

「むつ、何故鬼なんだ。私はただ質問しただけではないか。それに、フードを深く被っているはずなのに何故かなり可愛い子だと判断した」

「馬鹿か、お前は馬鹿か。あのねエ、お前みたいな美女が俺の事務所に普通に出入りしてたら、十中八九、ああ、ご婦人なんだなあ、チャンスねーんだなあ、なんて気持ちになるだろうが。それに俺はフード越しでも可愛い子がどうか分かる能力があるの」

「貴様は一体何を言つている。理解できる言葉で説明しろ。…まあ大方、その子を口説くつとでも考えていたのだつ。誰が貴様になどトキメクか」

「…んだとテメエ…」—見えても、昔は暴れん坊将軍とか言われてたんだぞ」

「黙れ独身。三十路になつてからもウダウダと…少しほは危機感といふものを持て」

「黙りな独身。テメエもそろそろ嫁入り考えないと、後でかなーり後悔するぞ」

突如始まった口喧嘩に少女は豆鉄砲と喰らつたハトのような顔をす

る。

先程まで凜々しい人だと思っていた人の豹変。魚が空を飛ぶようになったとかそんなキャチな変化じゃねー、もつと恐ろしいもののが近隣を

「ケツ、まあいいや…もついいや…。待たせたなお嬢ちゃん。や、中に入りな」

急に整えた服を崩し、土足で玄関に上がる事務所の主、ガジル。いや、よく見ると土足で上がったのではなく、素足で外へ出ていたのだ。

「……ちゃんと考へてゐる」

小さな声でふてくされるシグナムは、当たり前のよつに事務所の中へ入つていく。

その後姿を見た少女は、呆気にとられてゐる場合では無いと靴を脱ぎ事務所の中へと入る。

事務所の中は予測と反し、しつかりとしており、部屋の隅に積み上げられている家宝もとい大人向けの雑誌が無ければ清潔感が溢れた部屋だ。

色々と残念な男だな、と少女は心の中で思い、ソファーに腰かけたガジルを見る。

「…そんな哀れなものを見るよつな田で俺を見つめないで。や、お嬢ちゃんも座れよ」

少女は戸惑いながらも来客用のソファーに腰かける。

先程までふてくされていたシグナムが部屋にいないことに気づいた

少女は、最小限の動きで部屋の中を舐めるようにして探す。流石にこんな男と一人きりは辛いのだろうか。

「で、こんな朝早くから俺の所にやつてくるたア、何か依頼か？俺は美女または美少女または幼女にはサービスしてやるぜ」

「あ、あの…」

先程とは打つて変わつて、断然喋りやすい。心臓もかなり落ち着いている。しかしガジルのテンションに馴れていないのか、少々話しづらい。

「友人を探して欲しいんです…」

「友人？ てことは…人探しか」

「クリーと頷いた少女を見たガジルは、メモを取り出す。

「ふむ…じゃあまずお嬢ちゃんの名前から」

「ジークリンデ・エレミア、…」

「ジークリンデ・エレミア、か…なあ、俺に名前呼ばれるとき何て呼ばれて欲しい？」

「え？」

「呼ばれ方。ジークちゅわん、ジークたん、ジークさん、ジーク様、ジーク、の五つから選べるぜ。ちなみに五秒以内に応えられない場合は強制的にジークたんに」

「…ジーク、でいいです」

「トキメイタツ、良しじゃあ宜しく頼むぞ、ジーク」
ガジルが取り出した契約書にある程度目を通したジークリンデは、
契約を済ませる。
隣の部屋で女の子の声が聞こえてきたが、ガジルは構わずジークリンデに質問をする。

「そんじゃ、まず友人の名前を教えてくれ」

「ヴィクトーリア・ダールグリュン。久しぶりに会おうと思つて家
にいったんやけど…」

「いなかつた、と」

「…それで、一人で探して」

「いなかつた、と」

「クリーと寂しそうに頷くジークリンデは、脳裏にヴィクトーリアの姿を思い浮かべる。いつも自分に優しく接してくれる友達、その友達が急に行方をくらました。色々とジークリンデなりに探していくのだが、収穫は無し。仕方なく通りかかった怪しげな探偵事務所に足を運んだ。

「ヴィクトーは、強いから…誘拐とかは…」

「ふむ、じゃあ携帯で連絡を…いや、実行済みかな。まあ、此処

に居ても何も進展は無い。今すぐにでも出かけたいところだが、飯を食つてからでもいいか？」

時刻はやつと六時を回つたところだ。しかも休日といつ事もあり、ガジルは朝食をとつていない。

コクリと頷いたジークリンデを見たガジルは、失礼、と言つて台所へと入つていく。

「あ、ジーク。その様子じゃ、寝ないで探してたんだろ？ 朝食終わるまでくつろいでいてくれ」

確かに、寝ずに一晩中探し回つた。しかし何故それが分かつたのか。ジークは部屋の隅に置いてある鏡に自分の目を映し出す。隈は出来ていない。疲れている表情も無い。何よりフードが顔を隠しているので、顔色を確認することは出来ない。だが流石に疲れた。ジークリンデはガジルの言葉に甘え、ソファーに深く腰をかける。

「お、卵巻き随分上手くなつたな」

「あ、ああ！ 炒飯で練習したんだ！」

「あれ？ 関係なくネ？ ンじゃ、そろそろ出来上がりそつなのでアギト起こして」

「今日は休日だから、昼間で寝ているそつだ」

「…すつかり一ートになつちまつて。お前の一ートが移つたく

鈍い音が聞こえたかと思つたら、頭部にたんごぶを作つたガジルが朝食を運んできた。

朝食は二セット。先程の会話では一人分余計のはずだ。

「ジークも食つてけ。朝食もまだなんだろ?」

「えと、ソイ〇ヨイで…」

「…若者よ、お口メ食べろ」

テーブルに置かれたのは健康的な朝食の数々。

味噌汁は湯気に乗せて香ばしい匂いを運び、その湯気と結びつくかのように炊き立ての白米から出るもう一つの湯気、その傍らには眩い縁。丁寧に切られた菜つ葉の隣には、やや形が崩れ、少し焦げている卵巻き。

「卵巻きは、まあ気にするな。不味くない味だ」

「バツ！ ガジル！ 寄に食べさせるなビー！」

人事とは言え、客の前で香氣に料理の練習をしている方もどうかと思う。

「おーおー、客は朝をソ〇ジョイだけで済ませてきた腹ペコさんだぜ。俺は美女美少女幼女にはサービスを欠かさないんだ」

「だからと寄つて…」

「んな」とよつとつと食べづら

客が来ているのこのん気に卵巻きを作る方もあるが…
これ以上長引かせても時間の無駄だと判断したガジルは、やや強引

に話を終わらせる。

少し戸惑つも、待たせては悪いと判断したシグナムは、そつとガジルの隣に腰を下ろす。

ジークリンデはそんな二人の行動に微笑を浮かべるが、他人を笑うのは失礼だと思い、視線を料理へと戻す。思えば最近の食事はあまり健康的ではないような気もしていた。

「や、それじゃあ…お言葉に甘えて」

ジークリンデは箸を握り、感謝を籠めながら合掌。それに合わせるように、ガジルとシグナムも合掌をする。まずは味噌汁だ。片手でお椀を持ち、温かい味噌汁で喉を潤す。味は深く、されどじつじくない。

「美味しい…」

「そうか、口に合つて良かつた」

ジークリンデの箸が次々と進む。味噌汁から白米、白米から菜つ葉、菜つ葉から卵巻き。白米と菜つ葉は見た目も味も素晴らしい、形の崩れた卵巻きもしっかりと味わえる。

あつという間。本当にあつという間に終了した食事。だがしつかりと満たされた胃袋。ジークリンデは再び感謝を籠めながら合掌をする。

ガジルとシグナムは、お粗末さまでした、と微笑みながら言つ。

「さて、ジークの食事も終えたことだ。せつせと働きに行きますかな」

ガジルは卵巻きをパクッと口に放り込み立ち上がる。部屋の墨に行き黒いコートと財布を確保すれば準備は万端。事務所にはシグナムがいるのでアギトの心配は無用。必需品の大人向けの雑誌は今日は持っていない。

ジークリンデもガジルの行動に合わせて事務所を出るため立ち上がる。

「ガジル、夕食は何が良い?」

事務所の玄関に立った瞬間、客間からシグナムの弾んだ声が聞こえてきた。最近なにやらコツを掴んだ、料理のレパートリーが増えたと、少々ご機嫌のご様子。

「ワクワクするもの」

「ドライボールか?」

「……いや、流石にその返しは……うん、ないわ」

ジークリンデとガジルは客間から凄まじい勢いで飛んできた剣らしきものを紙一重で避け、やつと人気が増えた道へ踏み出した。

「で、その友人の知人に行方を尋ねてみるという手を取ったが…」

「盲点やつた」

その手があつたか、と感心そうに頷くジークリングテを溜め息をつきながら、ガジルは視界一杯に広がる見るからに豪華な学校に感嘆の息を漏らすガジル。

今一人が立っている所はSt・ヒルデ魔法学院の校門前。最近出来た学校で、最先端の魔法の学習や、魔法の発達などを行う学校である。

美しい学校に、隣で目を輝かしているジークリングテ。一方ガジルの瞳にはどこか哀愁が漂っている。昔を懐かしむような、大切なものを失つたかのような瞳。

やけに感傷に浸つている自分に失笑を浮かべ、響き渡るチャイムの音を拾つ。

「丁度、昼飯頃だろ?。挨拶するなら今が良いか」

「お願いします」

「あー…、そんなに畏まらなくても良い。敬語つてのは、敬うに語だ。俺なんかを敬つたつて何の意味も無い。個人的な趣味もあるがやつぱり愛称で呼んで欲しいな」

「愛称?」

「そうそう、例えば… ガーちゃん、とか

白い歯を覗かせて、下心満点の笑みを浮かべるガジルは、いつもより気持ち悪かった。やってしまったと心中自分を責めるが、これら来る日の前の少女が、何このおっさん気持ち悪い…と言つような

「顔で見られる」とは変わらない

「それじゃ、改めてよろしく、ガーリーさん」

「俺はここまで優しい心を持つた女の子に会ったことがあるだらうか…涙腺が

ことも無かつた。人生、何が起こるか分からぬものだ。思わず涙のダムが決壊しそうになつたガジルは、先頭を歩き、来客用の玄関に備え付けられた呼び鈴を鳴らす。すると、モニター越しに眼鏡をかけた、いかにも教師といった雰囲気の男が呼び鈴に応えた。

『はい。どうぞおこなうますか？』

「私、ガジル・アルタレッタと言つ探偵として、少し調べたい事があります……が……」

『探偵……あの、免許のようなものは……』

「ありませんが？」

『……念のため、住所と電話番号を』

「念？ アンタ今念つて言つたか？ つことはアレか、アンタは俺のこと疑つてるつてことだな？」

『は、はあ……身分が照明できない以上……』

「黙つて俺の名前、ヤツフローとかで調べてみるや。まあそんなチ

ンタラしてゐ暇ねえーから早速入れてもらひづぜ」

『あー、ちょ、ちょっとアナタ！ 管理局呼びますよー。』

「ケツ！ 管理局管理局と…自分で努力するつて言葉を知らんのか貴様ア！」

いつの間にか言い争いに発展していつたガジルを呆れたような目で見つめるジークリンデ。あのシグナムとか言う女性も苦労しているのだろうな…としみじみ思いながらも、二人の言い争いを見守る。

『もしもオーし！ 管理局さん！ 今変な人が押し寄せて』

「てめえ…！ チツ！ わアーったよ！ 僕の安全性を確かめれば良いんだろ！ この学園に俺の知人のカリムって奴がいるはずだ、カリムに俺のこと聞いてみな」

ガジルの一言で、教師は厄介なことが起こった、とでも言わんばかりの顔を見せ、教師はガジルに一礼して画面からその姿を消した。やれやれと首を振るガジルに、隣から言い争いを聞いていたジークリンデが尋ねる。

「ガーちゃん、カリムって誰？」

「ん？ まあ、このガツコーに勤める昔の友人かな。五年ぐらい会つてないけど」

昔を懐かしむように言つガジルの言葉はどこか弾んでいる。きっと此処に来る事が分かつたときから挨拶しようと思っていたのだろう。初めから彼女を尋ねに来たと言えば無駄な時間を使わずに良かつた

ものを…。

数分経つと、来客用の扉が開けられた。綺麗な長い金髪を持つた女性が、ジークリンデの瞳を捉えた。笑みを浮かべながら挨拶されて、いることに気づいたジークリンデは、慌てて一礼をする。

「よつ、久しぶりだな

「ふふつ、久しぶり…背、高くなつた?」

「俺はガキか、俺もお前もそんな歳じゃねーだろ

「怒るわよ」

「流石に悪いと思つた」

五年ぶりに会つた友人の変わりない姿に、両者とも笑みを漏らす。玄関で話すのも何だと、カリムはガジルとジークリンデを校内へと案内する。校内の廊下はまさに純白、『マリツツ無い』といふから見て生徒指導の能力の高さが分かる。

「で、本題なんだがカリム…この学校に、ヴィクトーリア・ダーレグリュン、という子はいるか?」

「ヴィクトーリア・ダールグリュン…待つて、今調べてみるわ

「頼む。俺とジークはヴィクトーリア・ダールグリュンの友人を訪ねてみる。何か分かつたら連絡を入れてくれ」

「分かつたわ。…それじゃ、不審者だと思われないようこね

「自信が無いな」

テンポの良い会話と、手続きを済ませたガジルは、ジークリンデを連れ長く続く廊下を歩き始めた。

この時、ガジルは心の隅で嫌なモノを感じていた。体調の優れ等では無い。もっと小さく、もっと恐ろしいもの。ガジルの人生が、何か不吉な事が起こると告げている。

「H口本、持つてくれば良かつたかな」

ガジルの卑猥な咳きは、珍しくスルーされていった。

依頼NO.5 ガーリちゃん(後書き)

シグナム「またか！ また私の出番は無いのか！」

ドナドナ「僕に言われましても……」

シグナム「貴様に言わなければならぬことはどうがッ！」

ドナドナ「あ、後半、あると、思ひついで……」

シグナム「…思ひ…」

ドナドナ「後半作ります」

依頼No.5 吞まれる足（前書き）

更新、誠に遅れました！

今回も次回に続くように書きましたので、腑に落ちないといふありますが、ご了承ください。

それでは、どうぞ！

「さてと、早速探ししますか。できれば……その……女子寮ーとか、あつたらね、そこから回つていこうか？ジークの友達も女の子なんだろ？じゃあそつしうつ駆け抜けよう」

「…」

ガジルは中庭の方に目を向ける。中庭では健全な女子高生が良い笑みを浮かべながら友達とキャツキヤしている光景が広がっていた。女子寮よりこちらの方が良いのかも知れないな、と予定を変更。

「ふーつ、何か興奮してきたー」

「いい加減せんと怒るよ?」

「大歓迎だ」

やや問題が有る返しを華麗にスルーしたジークリンデは、ガジルの後ろについてい行く。当然、二人の周りには、二人の邪魔にならないよう、野次馬が集まってきた。ただでさえ目立つ大男が廊下を堂々と歩いているのだ、集まらないわけが無い。目立つのは嫌いなジークリンデは、フードを深くまで被り直し、足取りを速める。

「全く、サインなら後にして欲しいな」

「ファン、いるの?」

「……」

そつこじうしている間に、中庭に到着。先程より賑わっているのか、生徒の人数が多くなっている。男子の割合よりも、女子の割合が更に増したことにより、ガジルの鼻息も更に増す。ここまで来ると流石のジークリンデも不快感を感じてきたのか、一步ガジルから距離を取る。

「良し良しあ、ちょっと行つてくるねー！」

かなりテンションが高いのが余計に気に触る。そのうちキモーイ、などと心の暴力を振るわれるのは日に見えてるので、せつせつと用事を済ませて欲しいものだ。

「おーい！ ジーク、この子か？」

「離せおつせん！」

目尻に涙を浮かべながら、少女の手を引く大人。傍から見れば哀れ極まりないが、早くも当たりを引いてくれたので良しとしよう。ジークリンデは、大きく頷きガジルに歩み寄る。

「ハリー・トライベッカ、この子で間違いないんだな？」

「離せつてこの つて、ジーク！ どうしたんだよここんな所で？」

ここまで来てやつとハリーの手を離したガジルは、リーダーを帰せ、と後ろで叫んでいる女の子達の相手をすることに専念する。罵倒されている中、良い笑顔を浮かべてるのは流石とでも言つておこう。

「ヴィクトー、何処にいるか知らん？遊びに行く約束しどたんやけど、どこ探してもおらんくて……今、探偵さんに一緒に探してもらってるんやけど」

「あのへンテ「お嬢様が？……そーいや、最近見てねーな……」

「そつか…ありがとな」

「あつ、そーいえばあのへンテ「お嬢様、どこか行くとか自慢してたな」

「ど、ど…」

「…もつと、女子高生と…ああ、女の子をお…！ 嘴呼、良いラインだったなア…真夏だつたら、こう、汗がムワツになつて…それからあ…それからあ…！」

「はあ……じゃあここからは私だけでえよ。ガーチャンは学校に戻つて暇潰しどつて」

「そつは行かない。君をこんな所に一人にするわけにはいけない」

とてつもない変態発言からの発言では、説得力は無い。とは言え、ジークリンデもこんな所では一人にはなりたくない。

今一人がいるのは、都市ミッドチルダが誇る超がつくほどセレブ街。視界一杯に広がる眩いばかりのイオンの光。やや薄暗いこともあり、その光には妖艶さが存在していた。

「良くパーティーとか、結婚式とか、異国のお偉いさん方がいらっしゃる街。ジークも知ってるとは思つが、ここはあまり良い噂は聞かない」

「うん。裏通りとかで、良く女人とか、お金持ちが襲われてるって話、聞いたことあるよ。…ホントかどうかわからんけど…」

「光には必ず影がつき物さ。照らされている部分が大きいほど、影の部分も大きくなる。きつと裏じや、こんなキラキラした風景とは正反対な、ドロドロしたもんが一杯だぜ。仕事でも何度も来てるが、大体厄介事だ。あんまり穩便に済むとは思わないでおけよ」

手をヒラヒラと振り、先を歩くガジル。ジークリンゲは、ガジルから感じる違和感にも似た不安も抱きながらも、その背中を追いかけた。

ガジルの言つとおり、表通りは華やかにだが、顔を覗かせた裏路地の入り口は「ミや何かの「骸が散らばつていた。猫同士の争いも、陽気な音楽にかき消される。

「…やつぱり、好かないな。生きてる気がしない」

「此処で悪をしたんか？」

「違うよ。悪をしたら、きっと此処でも生きてる気がするぞ。俺が言いたいのはさ、”つまらない”ってこと」

「つまらない？」

「うん。此処はちっとも面白くない。俺は変わりもんだから、こんなところより、風に揺れる風鈴を眺めるほうが面白いんだよ」

キザな台詞を残したまま、ガジルはある建物の前で足を止める。何も言わずに止まられたので、ジークリンデはガジルの固い背中に衝突。鼻を押さえながら、ガジルと同じように建物を見る。

「此処つて……」

「さてと、お仕事はもうそろそろ終わりかな」

二人が見上げている建物は、一言で言うのならば宮殿。純白の作りで、門の向こう側には入り口を挟むかのように、大きな噴水が二つ。太陽が完全に落ち、噴水を彩るライトの光が輝きを放つ。

「よくテレビとかで見るだろ。偉い人たちが此処で酒とか飲んだり、踊つたりしてるの」

「うん。ヴィクターも、ここに？」

「多分な。此処にも俺の知り合いがいるから、管理局様に頼むより簡単に入れるだろ。もし此処にお友達がいなかつたら、俺が君にしてやれることはない。管理局にも知り合いがいるから、今度はちゃんとした事件と捉えさせて、管理局に頼め」

「…無責任やな」

「ハツハツハ、笑ってくれてもいいぞ。探偵ってのは力がないんだ

よ

笑いながらも、ガジルは此処にヴィクトーリアがいることを確信していた。少なくともヴィクトーリアはここに住んでいないことは分かつている。これはジークリンデにも確認はとつてある。この街の目玉といえば此処だ。それ以外は外見だけが派手な酒屋、パチンコ、危ない店、そんな所だろう。それらがある場所も豪華な住宅街から離れている。

「大丈一夫、きっと見つかるさ」

「……うん」

ガジルは大きく頷くと、宮殿の中に入つていいく。ジークリンデも、ガジルの後を追う。

「でもえーの？ 私なんかのために…」

「ふつ、可愛い女の子の頼みとあらば…焼却炉の中砂漠の中ブルマの中…つてね」

「じゃあ此処におらんかつたら「俺には何も聞こえない」…」

ジークリンデとの会話を切つたガジルは、受付にいたガジルの知り合いらしき人と話をしている。

その光景を見ていたジークリンデに、ふと疑問が浮かんだ。世界中のお金持ちや王族などが集まる此処、厳重警備などが敷かれてもおかしくないところである。そんな所の、それも受付の知り合いに頼んだところで通してくれるのだろうか？

「いいだろオ！ 人と会いたいだけなんだけなんだからさア…」

「だからダメなんだつてガジルつつあんよオー！ んな理由で会える日が来るときや、そりやテロや反国家勢力のクリスマスだろオー よオ！」

「だつたら俺がサンタクロースだ！」

「管理局に突き飛ばすぞ…？」

……どうやら失敗に終わったようだ。しかし何と品の無い。明らかに浮いている。

なんだか聞いているこっちが恥ずかしくなってきたのか、ジークリンティはガジルのコートを引っ張り、ガジルをカウンターから遠ざける。

「ガーチャらん、もつちよつと静かに…」

「品が無いのは生まれつきだ。……しかしまあ、一理有る。人が一杯集まつてきたな。へつ、檻の中のチンパンジーにでもなつた気分だぜ。手え振つてみようぜ、きっとバナナの変わりにお金くれるだろいよ」

「ちよつとガーチャらん、私等不審者みたいになつと

「つて、手エ振つとる場合けやつで！」

「へーー！ そこのレディー！ お美しいですねーチューとかどうですか？ ちなみに僕一回もしたことないんで、エスコートお願ひできます？」

「捕まつてもおかしくない……ああ、嫌な音が聞こえてきおつた…

身の引き締まるような、捉えかたからすれば死神の足音にも似たサインレンの音。

辺りは、黒服スキンヘッドボーイズの皆さんのが囲んでいる。その周りには興味を示した貴族やお金持ちが集まつていた。ガジルは満足げに周囲を見渡す。捕まれば、まず社会的に殺されるであろう状況の中で、周囲を囲んでいた群衆の中の少女に笑みを浮かべる。

「……」じんだけ暴れりや大丈夫かな。じゃあなジーク、次に顔合わすときは豚箱の中でないことを祈ろひ」

「ま、待つてガーラーちゃん！ これから一体 」

ガジルはジークリンデの言葉を遮るように、ジークリンデの肩を抱き寄せ、耳の隣に口を持つてくる。まるで首筋に凶器を突きつけられたような感覚に陥つたジークリンデ。

「どんな理由があるにしろ、年頃の女の子が、踏み入れてはいけない場所もある。友達にも伝えときな」

言葉を聞いた途端、ジークリンデは心臓を驚撃みにされたような感覚に襲われた。恐怖ではない、驚愕の色だ。

隠し通したはずだ。少しのそぶりも見せずに、完璧といつても過言ではなかつたはずだ。

「残念だつたな。探偵は”カン”つてやつが命なのさ」

「…」を人差し指で、シンと突かれたジークリンデは思わず後ろにようめぐ。

ガジルはそのまま指を、ジークリンデを隠していたフードの添え、そのフードを剥がす。

ふわつ、と丁寧に手入れされた長髪が宙を舞う。未だ驚愕の色が残る可憐な顔が、ガジルを捉えた。

「やつぱり、俺の美少女センサーは一片の狂いも見せなかつたようだな。

メリークリスマス。朝起きたらきっといこことあるぜ」

「ま、待つて！ ガーちゃんつて！」

「ただのサンタクロースさ！」

ジークリンデの眼がガジルの笑みを捉えた瞬間、ガジルは腰を低くし、飛びかかろうとしていた黒服の足を払い。出来た隙間に飛び込む。

周りに悲鳴が上がる。しかしそれも数秒の間だけであつた。明日のビッグニュースの主役は、黒服達を捌ききり、外へと逃走したのだ。

「ジーク！」

呆気にとられているジークリンデに、金髪の少女が走り寄る。ジークリンデは、高貴なドレスに身を包んだ少女の名を呼ぶ。

「ヴィクトー！」

「…」めんね…、少し気になることがあつて…連絡を入れられなくて

「ううん。ええよ、私、てつきりヴィクターがあいつ等に捕まつたかと…！」

「心配かけて」めんなさい……それより、あの品の無い男の人は…」

「……サンタクロース、やつて」

「は？」

「美少女センサーは今日もバツチシ、ついでにヤナ予感センサーも決まつてたな…」

はあ…と、大きな溜め息をついたガジルは、一目から逃げるように街の中を走る。

もうすでに黒服スキンヘッダースの追跡は振り切つたものの、それは別のやつかいな事に巻き込まれてしまつた。

「足を突つ込んだのは俺だが……あーヤダヤダ、女の子を抱きしめてクンカクンカしてえ～な～」

そんな夢のようなことを思いながら蹴る地面はやけに重い。

ガジルが走る裏路地、その入り口ともいえるゴミ溜りには、先ほどの黒服とは違う男達の傷ついた体が転がつていた。体には殴りつけられたことによつて出来た傷跡が多数存在するものの、命に別状は

無い。

まるで拷問でもされたかのような服の乱れ、地面に散らばった携帯電話の残骸。

これらは全て、ガジルがやつたものである。

「午前一時に港町でヤクの販売、か……つたく、ジークも素直に言つておけばいいもののよオ、信頼されてないなー、ちょっとひしショックだわ」

そもそも、と自分の今までの振る舞いを思い浮かべ微笑するガジル。それと同時に、この事件には大きな悲しみがあること確信していた。ジークリンデが何故ガジルに隠し続けていたのだろうか、何故ヴィクトーリアと共に販売を止めようとしたのか、なにかきっと訳があるのだろう。

そして、探偵の”カン”が、この事件から漂つ危険な香りを嗅ぎ取つている。

「ふー…、シグナムに電話入れと」

これこそ管理局の仕事だと、ガジルは走りながら携帯電話を開き、シグナムに電話をかける。電話をかけて僅か一秒、シグナムが電話に出たのか「ール音が消えた。

よほど暇をしていたのだろうと、ガジルは呆れながらもシグナムに内容を伝えるべく口を動かす。

「あー、もしもシグナム?」

『…なんだ、もしもシグナムとは……?』

「中々斬新だろ。あ、言つとくけどガジルね、皆大好きガジルだよ

『分かつてゐる。で、何の用だ？ 私は今からアギトと一緒に風呂に』

「激しく良いな、俺も一緒に入りたい」

『つ……よ、用件はなんだ、はやくしろ』

「ん、そつだつたな、実は明日の朝午前一時に港町でヤクの販売が

」

言葉を続けようとしたガジルは、突然、体中の毛が逆立つかのような感覚に襲われた。殺氣と敵意が交じつた気配、もはや狂氣と呼んでもいいほどの居心地の悪さ。

ガジルは足を止め、口を閉じる。体中の神経という神経が研ぎ澄まされていく。風に揺れる葉の一枚一枚の響きすら聞き分けられるほどに。

「 どーやら、とんでもない奴に会つちまたみてーだな

『おい、どうしたガジル！』

「モーグー訳だ、頼んだぞ」

『待てガジル！ 一体何』

ブツン、と携帯電話の電源を切り、そつと振り返る。暗闇の中から金属をこすり合わせたような音が響く。この暗闇に包まれた一本道に、隠そともしないその狂氣、剥き出しへなつた敵意、押しつぶされるかのような殺意。

「おいおい本当に人間の狂氣かよ、勘弁してくれ作り物のお化けは大丈夫なんだが本物はダメなんだよ」

「……ガアジル・アルタレッタ、だなあ？」

「人違いだね、俺の名前はボブ。ガジルなんてイカした名前は持つた覚えはないぜ」

「ボブウ？ 人違いだつたかすまない謝る許してくれ」

「おいおい、そういう暇があるならさつさと消えてくれ、俺は肝が小さいんだよ ッ！」

刹那、ガジルの目の前に迫つた切つ先、本能的な動きで顔を右へ動かす。凄まじい勢いを保つたまま、西洋風の剣は空を切る。その瞬間、ガジルの頭部に衝撃と激痛が走る。

そのまま吹き飛ばされてしまいそうになるが、その勢いを利用して、体を反らしながら地面に手を付き、一本の腕で自らの体を持ち上げる。下半身を持ち上げる瞬間、左から迫つた腕を右足の裏で受け止め、その衝撃を体を支える腕に移動、そのまま勢いに任せて体を回転。コマのような動きで、襲い掛かってきた男の顎に右脚を叩きつける。

男は壁に叩きつけられ、ガジルは後方へ吹き飛ばされた。男を叩きつける瞬間、ガラ空きになつた体に蹴りを入れたのだ。

受身をとり、最小限の衝撃に抑えたガジルは、男へと目を向ける。

「…いきなり殺しに来るとは、品が無いな

「お互い様だろお…」

「それを言われると、困るんだ」

男とガジルの額から、同時に赤い血が流れる。互いを睨みつけ、距離を縮めるため、同時にゆっくり歩き出す。

互いにペースを緩める事無く、歩き続ける。不気味な光景に、響いていた葉が、その声を止めた。

身長はガジルと同等だろうか、灰色のコートに身を包み、顔に深く刻まれた皺、生氣の抜けた白髪、しかしその肉体は屈強で、一本の腕には両刃の剣が握られている。

「失礼した。俺と同じ二オイがしてな、つい手を出してしまった」

「まいったな、アンタと同じ二オイじゃ女の子にモテねーな」

歩みを続けた二人は、互いの間合いに入つた瞬間、ほぼ同時に右脚を地面に叩きつけた。響いた音が、狭い通路に反響してゆく。音が消える頃には、立ち位置が逆さになり、ガジルの頬に血が、男の頬に痣が残されていた。

「…………くつくつく……」

「くくく……」

互いの腕を確かめ合うかのように結ばれた視線、その視線が交じつた途端に、一人の男は傷を残された顔に笑みを浮かべた。

路地裏の狭い空間に、狂氣が溢れかえる。男のものと、ガジルのもの。

入り混じつた二つの狂氣を流すように、不気味な風が街を走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277u/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS でいくついく!!

2012年1月12日18時59分発行